

# 千葉教育

## 菊

令和5年度  
No.682

千葉の子どもたちの未来のために

**特集**

## 特別支援教育の推進

○シリーズ 現代の教育事情

二松学舎大学教職課程センター 教授  
県教育庁教育振興部特別支援教育課

岡田 哲也

○提 言

千葉ジェッツふなばし  
取締役・パートナー本部長

佐藤 博紀



千葉県総合教育センター

# 学校自慢

## 「子供が豊かに育つ教育 世の中を優しくする学校」を目指して

県立君津特別支援学校校長 ささき みさお 佐々木 操



### 1 はじめに

本校は、全校生徒302名、76学級の県内でも大きな特別支援学校の1つである。

過密化による教室不足や狭隘化が課題ではあるが、教職員がいつも笑顔で元気に子供とかわり、創造と工夫による教育活動を展開している。

### 2 「チーム君特」で「できる」を創る！

#### (1)防災の達人を目指して！

令和3年度に県の指定を受けて取り組んだ「命の大切さを考える防災教育」。自分で迅速な「行動」がとれるようにする「自助」と、学校・家庭・地域等が子供たちに代わって適切な「判断」等を行う「共助」の両輪で子供たちに「命の大切さ」を伝えていくことが大切だと学んだ。各学部の実態に応じた防災学習や避難訓練、防災給食など、継続して実施しており、事前指導用の動画やワンポイント避難訓練など、活動の拡がりとともに、子供たちの意識は高まっている。

#### (2)学びの足跡を大事に！

過密化で活動場所が限られる中、学級や学年での学習の記録としての掲示物や制作活動としての作品が、教室や廊下の壁面に溢れている。梅雨の時期には、工夫を凝らした数十種類の紫陽花を見ることができし、学習の記録に必ず添えられる温かい担任のコメントに、子供たちの笑顔が輝く。



#### (3)心に届く性教育！

体の名称や洗い方、男女の体の違い、思春期の体の変化、友達との距離感など、発達段階や実態に応じた性指導に取り組んでいる。また、多様な性について考えたり、生命誕生について助産師を招いて話を聞いたりする中で自分を大切にすること、そして友達も大切にしようとする心の育みにつながっている。

#### (4)目指せ むし歯ゼロ！

保健室から発信された「感染予防の歯磨きスタイル」。マニュアル化され、養護教諭が各クラスを回することで、担任と連携して歯磨きの指導を行っている。学校医の協力もあり、毎日の積み重ねが習慣となり、むし歯への関心とともにむし歯の治療率が上がり、むし歯のない子供が増えてきた。

#### (5)給食もみんなで！

給食で使うたまねぎの皮むき、空豆の鞘取りなど、食材の下準備を手伝う機会を設けている。準備に携わることで苦手な野菜も食べてみようという気持ちの芽生えにつながっている。また、ペースト食の子供たちには、ペースト食アートを通して、目でも楽しめる給食に食欲が増している。



### 3 おわりに

伸びようとする子供たち。その可能性を最大限に引き出し育てるとともに、その営みを通して、子供たちの持つ純粋な心や人を元気づける力などにより、世の中を優しくする学校を目指していく。

- ◆学校自慢 「子供が豊かに育つ教育 世の中を優しくする学校を目指して」  
 県立君津特別支援学校校長 佐々木 操
- ◆提言 ～バスケットボールを通じて千葉県へ恩返しを～  
 千葉ジェッツふなばし 取締役・パートナー本部長 佐藤 博紀…2
- シリーズ 現代の教育事情 特別支援教育の推進**
- 全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進  
 二松学舎大学教職課程センター教授 岡田 哲也…4  
 ■千葉県の特別支援教育  
 県教育庁教育振興部特別支援教育課…6
- チーム学校の仲間たち**
- 学校を創る 子供も大人も一人一人が輝く学校づくりを目指して 佐倉市立内郷小学校校長 山本 健太…10  
 ■学校を支える 子供たちと共に歩む学校を目指して 松戸市立高木第二小学校教頭 北林 真理…12  
 ■学校を動かす 「学校全体で取り組む特別支援教育」の実際～特別支援コーディネーター、特別支援学級担任の立場から～  
 浦安市立高洲中学校教諭 周 美恵子…14  
 ■授業を創る 命を守る防災教育授業 鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校教諭 島村 拓哉…16  
 ■授業を創る 多面的・多角的な考えを引き出す道徳科の授業づくり  
 八千代市立みどりが丘小学校教諭 前田 彩…18  
 ■学校で伸びる 失敗から学ぶ成長 八街市立交進小学校教諭 奈良 百花…20  
 ■学校で伸びる ともだちっていいな 県立夷隅特別支援学校教諭 足立 侃介…20  
 ■幼児教育の今 子供主体の教育・保育への一歩 市原市八幡認定こども園園長 齋藤 純子…21
- 長期研修生報告**
- 令和4年度長期研修生の研究の紹介 令和4年度長期研修生…22
- ケーススタディ～Change the world～**
- 自ら学び、互いに高め合う児童の育成～情報活用能力を生かした学びを通して～  
 船橋市立二宮小学校教諭 西川幸太郎…26
- 情報アラカルト**
- 理科指導における「授業デザイン集」と「指導資料」について～探究する学習のヒント～令和4年度調査研究より  
 県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班…28
- 休日開放事業／教育講演会のお知らせ「発達障害の子とハッピーに暮らすヒント」  
 県総合教育センター特別支援教育部…29
- オランダとの文化交流事業「テオ・ヤンセン展」  
 県立美術館…30
- 千葉県誕生150周年記念 企画展「はかる」  
 県立現代産業科学館…31
- 千葉県誕生150周年記念 「写真で見るちばのあゆみ」パネル巡回展  
 県立中央博物館…32
- 千葉県特別支援学校作品展～ちば特別支援教育フェア2023～の開催について さわやかちば県民プラザ…33
- 学校 NOW !**
- 我が校の働き方改革 ICTを活用した働き方改革～仕事の負担軽減にむけて～  
 成田市立三里塚小学校校長 村田 正志…34
- 高校NOW ! 【連載・県立高校の今】第3回  
 千葉商業高校（起業家育成に関するコース）  
 一宮商業高校（観光に関するコース） 県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…36
- ◆発信！特別支援教育 病気療養中の児童生徒に対するICTを活用した学習保障や支援の在り方の実践  
 県立仁戸名特別支援学校教諭 朝生 健太…38
- ◆千葉歴史の散歩道 千葉県の旧石器発掘の“嚆矢”～市川市丸山遺跡～  
 県教育庁教育振興部文化財課埋蔵文化財班班長 永塚 俊司

## 道 標

平成19年4月に特殊教育が特別支援教育に変わってから16年が経過した。この間、本県においては、特別支援教育に関する諸施策を策定し取り組んできたところである。

令和4年3月には、「第3次特別支援教育推進基本計画」（以下、「推進基本計画」）、「第3次県立特別支援学校整備計画」（以下、「整備計画」）を策定した。推進基本計画の基本的な考え方には、「障害の有無に関わらず、誰もがその能力を發揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りを持って生きられる社会の構築の基礎を培う教育の実現を目指す。」とあり、特に通常の学級における特別な支援が必要な子供については、平成30年の学校

教育法施行規則の一部の改正により、「高等学校における通級による指導」が制度化され、対象を広げたところである。

また、整備計画では、「現状の過密状況への対応と今後見込まれる在籍児童生徒数増加への対応」の2つに取り組むこととしている。これらを受け、各学校では、「一人一人が輝く共生社会の形成に向けた特別支援教育の推進」の実現を目指して教育活動に取り組んでいるところであろう。

本号では「特別支援教育の推進」をキーワードに掲げ、本県における特別支援教育の現状と展望について解説、紹介する。今後の特別支援教育の充実に向けた一助になれば幸いである。

## ～バスケットボールを通じて千葉県へ恩返しを～

千葉ジェッツふなばし 取締役・パートナー本部長 さとう ひろき 佐藤 博紀



人生の意味。そんなことを、誰しもが一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。私がそれを意識しはじめたのは、2005年のbjリーグ開幕時に本格的にプロバスケットボール選手としての活動をスタートさせた頃でした。今でこそ、日本代表の目覚ましい活躍もあり、連日のように試合中継やニュース速報などでバスケットボールの話題を目にするようになりましたが、当時は、体育や部活動で触れたことはあっても、観戦を楽しむごく一部の熱狂的なファンが支持するマイナーなスポーツでした。しかし、世界に目を向ければその競技人口はサッカーよりも多く、国内でさえ中学・高校における部活動での競技人口はサッカーや野球を凌駕すると言われていました。自分もそんなバスケットに魅了されて幼少期から一筋に打ち込んできた身として、なぜこんなにも奥深く、競技人口も多いスポーツがこの国で日の目を見ないのか。もっと多くの方に、野球やサッカーと同じく、いやそれ以上に感動や興奮を届け、バスケットボールを通じて日本を元気にすることができるのではないかと。そう自問自答し続けていました。そんな折、2011年に私の故郷でもある千葉県唯一のプロバスケットボールチームとして、千葉ジェッツが誕生したのです。現在は日本代表でキャプテンを務める富樫勇樹選手を筆頭に、多くの人気選手を抱えるクラブへと成長を遂げた千葉ジェッツですが、もちろん設立当初は誰も知らない無名のチームでした。ですが、私の中で確固たる決意がメラメラと燃え出したのを鮮明に覚えています。自分が生

まれた千葉県に根を下ろす、この千葉ジェッツというチームの名を全国に轟かせよう。そして、千葉ジェッツというチームを通じて、バスケットボールの魅力をもっと多くの人に知ってもらい、私を育ててくれたバスケットボール、そして千葉県へ恩返しをしようと。bjリーグの開幕と同時にふつふつと湧き上がっていた自分の「人生の意味」というものを、明確に意識した瞬間でした。今回この依頼をお受けしたのも、この文章を通じて一人でも多くの方にバスケットボールのことを知ってもらうこと、また私のバスケットボール人生における経験が、少しでも教職員の皆さまが子供たちと向き合う上での何かしらの道しるべになればという思いからです。お伝えしたいことを大きく3つに分けて、出来るだけ分かりやすく皆さんにお届け出来ればと思います。

まず、スポーツと教育がとても密接だということ。私は小学校4年生のころにバスケットボールと出会いました。小学校4年生の時に赴任してきた先生がミニバスケットボールチームを創設したのが理由です。私にバスケットボールに対する興味を持たせてくれたことが全ての始まりでした。中学でもバスケットボール部に入部し、今は部活動が地域移行化されつつありますが、当時の先生はとても熱心に指導してくださいました。そのおかげで八千代高校に推薦で進学ができ、バスケットを続けることが出来ました。高校ではバスケットをする以前に人としてどのようにあるべきかを多く学びました。スポーツを通じて

人間性や社会で生活していく上で大切なことを学んだと思っています。仲間との協調性やコミュニケーションの重要性、目標を掲げ、なりたい自分とチームの目標を並べてステップアップしていくことの楽しさや、当たり前ですが人の話は目を見て聞くことや話すこと、挨拶をすること、道具や使用するものは大切にすること、関わる全ての人への感謝を忘れないことなど、私が社会に出てから通ずるものが本当に多くあると感じております。全て当たり前のことかも知れませんがバスケットボールとともに私は成長出来たと思います。もちろん普通の学校生活の中で学んだことも大切だと思いますが、スポーツを通じたことで学びに深みが出たと思っています。私も3人の子供を持つ、父親です。子供たちは家庭より学校にいる時間が長くなっていく中でどのような時間を学校で過ごしているかはとても大切なことだと思います。私の人生の師は先生方でした。毎年多くの子供たちが入学して卒業して行く中で、目まぐるしい毎日かと思えます。千葉県を本拠地とするスポーツチームとして先生方とともに、一人でも多くの子供たちがハッピーとなる千葉県を、皆様と協力をして作っていきたくと思っています。

次に、千葉ジェッツというクラブを皆様に知っていただければと思います。千葉ジェッツは創設時より、地域密着型のクラブチームであることを誇りとしています。もちろんチームは強く、応援されるクラブでなければいけません。しかしながら、スポーツクラブがただバスケットの運営をしているだけでは千葉県や社会にとっての存在意義が欠けてしまうと考えています。スポーツのもたらす影響力は強く、地域の皆さんの日常になるために何でもやってきました。学校訪問やバスケットボールクリニック、地域のお祭りへの参加、

企業と地域をつなぐための取組として、スポーツを通じた社会貢献「JETS ASSIST」の発足、子ども食堂や絵本の寄贈などを通し地域へ根を広げています。所属選手も、自ら活動を考案し、地域活動を行っています。また様々な市と包括協定を結び、活動の場を広めています。このような活動を設立当初から続けて来た結果、千葉県には、バスケットボールは、【する】文化だったものから少しずつバスケットボールを【見る】文化も根付いて来ていると思います。これからも地域のために頑張っていきたいと思っています。

終わりに、今後の日本のバスケットボール界についてです。2016年にB Leagueが発足して8年目となります。バスケットボール界は今まさに【B.革新】と命名された構造改革が進んでおります。B. LEAGUE PREMIERとして2026年からの開幕を目指し、世界一型破りなライブスポーツエンタメにというコンセプトのもと、国内外有望な選手がプレーする高いレベルの環境や世界基準の技術力を誇り、国際大会でも活躍するクラブの誕生を目指し、開幕するリーグです。今のB1のチームがB. LEAGUE PREMIERへと昇格し、参入するためには厳しいライセンス基準を達成していることが前提です。千葉ジェッツは全ての基準をクリアしており、アリーナに関しては南船橋に【LaLa arena TOKYO-BAY】という1万人収容の新アリーナの竣工を2024年春に予定しています。子供たちが憧れ、目指したくなる夢のあるリーグ、クラブになることを誓い、千葉県を盛り上げていきたいと思っています。私がプロバスケットボール選手としてスタートした時から約20年の月日が経ちました。今後も私の人生をかけて千葉県のバスケットボールの発展のために頑張っていきたいと思っています。

## 全ての人の可能性を引き出す 共生社会の実現に向けた教育の推進

二松学舎大学教職課程センター教授 おかだ てつや 岡田 哲也



### 1 はじめに

千葉県教育庁特別支援教育課HPにある令和3年度の「千葉県の特別支援教育」によれば、令和2年度中学校特別支援学級卒業生1,092人のうち、高校へ進学した生徒は469人で、卒業生全体の43%であり、特別支援学校に進学した生徒は562人、51.5%であった。公私別ではおよそ半々、どちらにも知的障害の学級から70人～80人弱が入学していた。情緒障害の特別支援学級からは公私合わせて319人の生徒が入学していた。情緒障害の学級からは、特別支援学校にも94人入学していた。

平成16年度中学校特別支援学級卒業生は411人であり、高校進学者は91人で卒業生全体の22.2%であった。平成16年度と令和2年度を比較すると、特別支援学級卒業生の高校進学者が増えていることがわかる。

令和3年度の文部科学省学校基本調査によれば、中学校特別支援学級から高校への進学率は全国平均56.8%であり、千葉県よりも高い割合で高校へ進学していることがわかる。

一方で、千葉県教育庁学習指導課HPによれば、令和3年度千葉県公立高校入学試験において、2次募集人員数は全日制1,937人、定時制573人、入学候補者数全日制179人、定時制26人であった。定員に対する充足率は国立や私立を含めて約92%であった。学校基本調査から、全国平均は約88%であった。つまり、高校は、千葉県も全国的にも定員を埋め切れない状況であるため、知的障害の生徒も合格している状況であることがわかる。

通級による指導は、令和2年度文部科学省

特別支援教育課「通級による指導実施状況調査」によれば、千葉県では小学校6,918人、中学校572人であり、在籍者の約1.6%が通級による指導を受けており、全国平均約1.7%とはほぼ同じであった。千葉県の高校の生徒1学年5万人弱のうち、約1,000人程度は通級による指導を受けた経験、約500人弱は特別支援学級の経験があることとなり、合わせると1学年あたり約3%となる。

令和4年度文部科学省特別支援教育課「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」によれば、通常の学級に在籍する学習面又は行動面で著しい困難さを示す児童生徒は、小中学校で8.8%、高校で2.2%の教員が感じているとの報告がなされた。このうち、「授業時間内に個別の配慮・支援を行っているか？」という設問に対して、小中学校で54.9%、高校で18.2%が行っていると回答している。

### 2 権利条約の審査・改善勧告への対応

国連総会で平成18年に採択された「障害者の権利に関する条約」が我が国においても平成26年に批准された。約10年が経過し、国連の権利委員会による審査が行われ、総括所見改善勧告が出された。教育部分についてポイントを要約すれば、知的障害や発達障害・障害の重い児童生徒が通常学級で学べていないこと、特別支援学級が存在していること、特別支援学級の生徒が、在校時間の半分以上を普通学級で過ごしてはならないという令和4年に発出された文部科学省の通知の撤回、合理的配慮の提供の不十分さ、通常の学級を担



当する教員のインクルーシブ教育に対するスキルの欠如および否定的な態度等が述べられていた（国連HP）。

これに対して、文部科学大臣は令和4年9月に以下の所見を述べた（文部科学省HP要約）。

「文部科学省では、このインクルーシブ教育システムの実現に向け、障害のある子供と障害のない子供が可能な限り共に過ごす条件整備と、一人一人の教育的ニーズに応じた学びの場の整備、これらを両輪として取り組んできた。特別支援教育への理解の深まりにより、特別支援学校、特別支援学級に在籍する児童生徒が増えている中で、多様な学びの場において行われる特別支援教育を中止することは考えてはいないが、勧告の趣旨も踏まえて、通級による指導の担当教員の基礎定数化の着実な実施などを通して、インクルーシブ教育システムの推進に努める。特別支援学級の児童生徒が学校時間の半分以上を普通学級で過ごしてはならないという文部科学省の通知は、通常学級での学習が可能なら特別支援学級から通常学級に移して、共に学ぶことを大切にすることが趣旨である。」

文部科学省がこれまで行ってきた日本型のインクルーシブ教育システムをつくり上げていこうとする姿勢がよくわかる所見であった。

### 3 教員に求められる資質・能力

昨年度の千葉県・千葉市公立学校教員採用候補者選考の共通問題「教職教養」で小・中・高・特別支援学校の学習指導要領の問題が全員に課された。特別支援の問題は、障害の改善や克服、環境の改善の指導内容である専門性の高い「領域」である「自立活動」であった。

問題構成の趣旨について、どの校種の教員になっても、発達段階を考慮した指導と困難さのある児童生徒に必要な指導と適切な支援ができる教員を採用したい、こういう問題を作成することで今後受験してくる人々に求める資質・能力とは何かを考えて欲しい、とい

う願いがわかる。

高校には前述したように、小中学校で通級による指導を受けていたほぼ全ての生徒と特別支援学級で学習した約半分の生徒が在籍している。他にも、障害の認定を受けてこなかった生徒、新たに病気や障害を持つことになった生徒等が在籍している。進路選択に際して、適性にあった進学や就職、障害者手帳を持っていた上での通常の就職、障害者手帳を用いた障害者雇用での就職、就労移行支援等の福祉サービスの活用、障害基礎年金の申請や再就職につながる相談支援との連携等、高校の教員は生徒の卒業後の人生の方向性を担っている。

小中学校の特別支援学級を卒業して特別支援学校に進学した生徒の大半が就労または就労の準備のための関係機関に進路選択をしている。就労や福祉サービスを継続して、安定した生活をしていくには、精神的な安定と趣味を含めた生活の充実が欠かせない。障害のある児童生徒の高校段階修了後の生活の充実のために、小中学校の先生方が積み上げてきた本人及び保護者の障害の受容、愛着形成、係活動等による役割意識、社会的承認等のキャリア形成が大きな役割を果たしている。精神的に安定しており、生活が充実している生徒は就労場所での継続率や生活の満足度が高い、という研究結果もある（流山高等学園）。

今年度の新規採用者から各大学では「特別支援教育概論」を全員が学修している。いずれ学習指導要領の各教科に知的障害の内容が加わり、どの教室でもさらに発達段階を踏まえた教育を行うようになることは想像に難くない。全ての新規採用教員が10年を経過する頃までに特別支援教育の現場の経験ができるよう人事交流を行う方向も文部科学省から発信された。どの校種でも一人一人の能力・特性に応じた個別最適な教育を行うことができる教員を育成することが鍵となる。

## 千葉県の特別支援教育

### 県教育庁教育振興部特別支援教育課

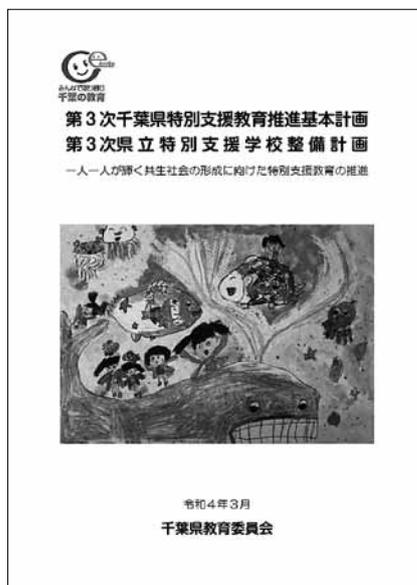
#### 1 はじめに

平成19年度から始まった特別支援教育は、今年4月で17年目を迎えた。この間、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され、障害を理由とする不当な差別的取扱いの禁止はもちろん、本人や保護者から意思表示された合理的配慮の提供が義務化された。すべての学校で特別支援教育を実施するという考えは当たり前のものとなったように感じるが、千葉県の状況はどうだろうか。

本稿では、特別支援教育に関する国の動向を踏まえ、千葉県の特別支援教育の取組について紹介する。

#### 2 第3次千葉県特別支援教育推進基本計画

令和4年3月、千葉県教育委員会では、第3次千葉県特別支援教育推進基本計画を策定した。



第3次千葉県特別支援教育推進基本計画

国が示す共生社会の形成に向けた特別支援教育の理念を踏まえるとともに、第2次計画の基本的な考え方を引き継いでいる。さらに共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りを持って生きられる社会を構築するという考えを推し進めるものである。

本計画は、障害のある幼児児童生徒に対する教育のみに着目するものではない。障害の有無に関わらず、誰もがその能力を発揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りを持って生きられる社会の構築の基礎を培う教育の実現を目指しており、これを「一人一人が輝く共生社会の形成」としている。

幼児児童生徒一人一人のより良い成長には、最も身近な理解者であり支援者である保護者が、元気に活力ある生活を送っていくことが重要である。家族も含めて「一人一人が輝く」ように取組を推進している。

基本的な考え方を踏まえ、第3期千葉県教育振興基本計画に示されている「千葉県教育の目指す姿」の実現に向け、本計画では5つの「重点項目」を挙げ、その下に25の「主な施策」、更に130の「具体的な取組」を配置している。本計画はホームページにも掲載しているので、ぜひ、目を通して、特別支援教育の推進に取り組んでいただきたい。



### 3 小中学校、高等学校における特別支援教育の充実

#### (1) 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」

令和4年12月に公表された文部科学省が行った「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果では、通常の学級に在籍し、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒数の割合は、小中学校において推定値8.8%、高等学校においては推定値2.2%となっている。本調査は専門家による診断や医師による診断によるものではなく、学級担任等が記入し回答したものであることに留意が必要であるが、全ての通常の学級に特別な教育的支援を必要とする児童生徒が在籍している可能性があることは明らかである。

そのための環境整備として、小中学校の通級による指導に係る教員定数の基礎定数化の確実な実施や、高等学校における通級による指導の制度化（平成30年度）等により、通級による指導の体制の充実を図るほか、通常の学級において、合理的配慮の提供や、特別支援教育支援員による支援などが行われている状況にある。

#### (2) 高等学校における特別支援教育

千葉県でも平成30年度から高等学校における通級による指導が開始され、令和3年度から10校の県立高等学校で実施されている。実施校の担当教師が、在籍する生徒を対象に指導を行う「自校通級」を原則としているが、実施校以外の学校からも指導の要望があり、令和5年度から他校の通級指導教室に担当教師が巡回し、指導を行う「巡回指導」も2校で実施している。

通級による指導の対象となるのは、言語障

害、自閉症、情緒障害、弱視、難聴、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、肢体不自由、病弱及び身体虚弱の生徒で、通常の学習におおむね参加でき、一部特別な指導（自立活動）を必要とする程度のものになる。「自立活動」の内容は、生徒それぞれの困っていることを改善するための内容だが、周囲の人たちとうまく関係をつくるにはどうしたらよいか、感情をコントロールできるようになるためにはどうしたらよいか等、生徒一人一人に合わせた方法を工夫しながら指導を行っている。

県立高等学校における通級による指導実施校 令和5年5月現在	
(自校通級)	幕張総合高等学校
千葉大宮高等学校	船橋豊富高等学校
松戸向陽高等学校	松戸馬橋高等学校
佐倉南高等学校	佐原高等学校
長生高等学校	君津青葉高等学校
袖ヶ浦高等学校	
-----	
(巡回指導)	泉高等学校 柏南高等学校

高等学校でも通級による指導を受ける生徒が年々増加し、自立や社会参加を図るために必要な力を身につけ、通常の学級における授業の理解促進や生徒指導上の問題解決につながっている。また、生徒本人の学習意欲や自己肯定感の向上につながる効果が期待されている。教員や保護者にとっても、学校全体で特別支援教育に取り組む体制が整備され、特別支援教育に対する理解が深まり、関係機関とのネットワークが活用できるといった効果が期待されている。

本県では、通級による指導のほかに、県立高等学校に在籍する生活全般に介助を要する生徒に対して、特別支援教育支援員を配置している。移動支援や技能教科や実技教科等で

の学習の補助を行っている。この支援により他の生徒と共に学習や学校行事に参加することができている。

### (3)特別支援学校による教育・支援

県立特別支援学校17校では、小中学校の児童生徒を対象に「通級による指導」を行っている。視覚障害や聴覚障害、肢体不自由、病弱の児童生徒に対して、専門的な指導を提供しており、複数の障害に対応している学校もある。対象児童生徒等の障害の状況や通級のしやすさにより、特別支援学校だけでなく、サテライト教室や巡回指導といった様々な形態で「通級による指導」を展開している。これにより、障害のある児童生徒が切れ目ない支援を受けることが可能となっている。今後も市町村教育委員会や小中学校と連携し、指導を実施していく。

さらに、地域で障害に応じた指導が受けられるように複数の障害種に対応できる特別支援学校を整備し、教員の専門性の向上に努めている。免許法認定講習等での障害種に応じた特別支援学校教諭免許状の取得を勧めたり、通級による指導の担当者が、専門的な指導を実施している学校での研修に参加したりして、専門性の向上を図っている。

## 4 切れ目ない支援体制の充実

文部科学省は令和3年6月に「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」を公示した。障害のある子供一人一人の教育的ニーズを踏まえた適切な教育の提供や、就学後を含む一貫した教育支援の充実が図られるよう、また、障害のある子供の教育支援に携わる全ての関係者の指針となるよう、「教育支援資料（平成25年10月）」の名称を変

更するとともに、内容の改訂を行った。

今回の改訂では、特に、教育的ニーズの変化に応じ、学びの場を柔軟に見直すことについて改めて理解を深め、一貫した教育支援の中で、就学先となる学校や学びの場における学びの連続性の実現を一層推進していくことが示されている。

その中で、第3章の11では情報の引継ぎについて示されている。就学や進学等の際における情報の引継ぎの重要性や、教育のデジタル化を踏まえた環境整備が必要であることを踏まえ、個別の教育支援計画の作成・活用に関する記述がされている。支援の内容等に関する情報を切れ目なく確実に引き継ぐことが重要であることを示した。

特に小中学校等の特別支援学級や通級による指導で様々な指導を受けていた生徒が、高等学校において指導を受けるに当たって、小中学校等での指導や合理的配慮の状況などが十分引き継がれていないとの状況が散見されることから、「個別の教育支援計画」やこれまで各地域で共有されてきた関連資料を活用し、小中学校等での指導を高等学校での指導につなげていくことの重要性が指摘された。

個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成について、特別支援学校、特別支援学級に在籍する児童生徒、通級による指導を受けている児童生徒については作成し活用することが学習指導要領に明記されている。本県においても両計画の作成は進んでいるが、活用（引継ぎ）となると、まだ十分とは言えない。文部科学省からは、別途、「個別の教育支援計画の参考様式について（事務連絡）」なども発出された。本県においても個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成や両計画を活用した情報の引継ぎに重点的に取り組んでいく。



## 5 ICTの利活用による教育の質の向上

先に挙げた「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議」では、障害のある子供の学びの場の整備と連携強化、特別支援教育を担う教師の専門性の向上、ICT活用等による特別支援教育の質の向上、関係機関の連携強化による切れ目ない支援の充実について報告された。

本県では令和3・4年度に文部科学省の「ICTを活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実（ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究）」を受託し、障害種別に、遠隔による自立活動の効果的な指導の在り方について明らかにすること等を目的として、「遠隔による自立活動の効果的な指導」に取り組んだ。

移動時間と空間の制限を超えて、遠方の児童生徒とオンラインを活用して行ったペア学習や交流学习が効果的であったとの報告が多くあった。今後も、ICTを活用し、外部機関等と学校が連携して児童生徒の指導・支援をする「学びのネットワーク」を構築し、活用していく。

研究の詳細は『ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究 実践報告パンフレット』と『遠隔による自立活動の指導スタートガイド』にまとめた。県教育委員会ホームページを参照していただきたい。



## 6 特別支援学校の整備

令和4年に流山市に「東葛の森特別支援学校」が開校し、県内の県立特別支援学校は37校になった。特別支援学校は近年児童生徒数が増加し、過密化が課題となっている。今後も受け入れ規模を超える児童生徒数が見込まれることから、特別支援学校の整備を進めていく予定である。計画については、先に紹介した「第3次千葉県特別支援教育推進基本計画」と併せて策定された「第3次県立特別支援学校整備計画」を参照していただきたい。

## 7 これからの時代の特別支援教育

障害の有無に関わらず誰もがその能力を發揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りを持って生きられる社会の構築を目指すには、インクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要がある。

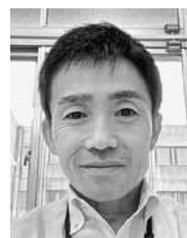
切れ目ない支援を充実させ、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、本県では、今後も連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備を行っていく。



国立特別支援教育総合研究所では障害種別の短期専門研修を実施し、毎年県内の特別支援学校の教員が参加している。インクルーシブ教育システムの充実に関わる指導者研修会には、小中学校や高等学校の教員も参加している。同研究所が開設しているホームページには「NISE 学びラボ」という研修コンテンツがあるので、ぜひ活用していただきたい。



## 子供も大人も一人一人が輝く 学校づくりを目指して



佐倉市立内郷小学校校長 やまもと けんた 山本 健太

### 1 はじめに

私は現在の職に至るまで、中学校で14年間特別支援学級の担任を、佐倉市教育委員会で9年間特別支援教育・就学指導の担当指導主事をさせていただいた。その間、たくさんの子供や保護者、園や学校、関係機関の皆様との出会いがあり、その経験から子供の成長について様々なことを学ばせていただく機会に恵まれた。

この職に就き、ぜひこれまで培ってきた特別支援教育の視点や考え方を生かし、一人一人が力を発揮し、輝くことのできる学校づくりをしてみたいと考えていた。

今回執筆の機会をいただいたので、拙い実践ではあるが、私の学校づくりについて、その考えを述べさせていただく。

### 2 特別支援教育の視点とは

特別支援教育の視点にはいくつかあると思うが、私は、「苦手なことに焦点を当てて改善・克服に力を注ぐよりも、得意なことに注目して伸ばすことで自分への期待値を高め、そのもてる力を最大限発揮できるようにする教育」と捉えている。そして人の成長とは、小さな点の積み重ねであり、時間がかかるものと考えている。現在勤務する学校は通常学級が6学級、特別支援学級が2学級の合計8学級で全校児童は162名という小規模校である。それでも、困難さを抱える児童は一定数存在する。そして教職員も、それぞれに持ち味があり、一人一人に様々な個性がある。

私は、子供に対しても、共に働く教職員に対しても、一人一人の違いを丁寧に見て、その違いに適した働きかけをし、それぞれが自分に自信をもち、最大限の力を発揮することで、学校全体が生き生きと生活できる場になると考え実践している。

### 3 具体的な取組の一例

#### (1)児童の実態を全教職員で正しく把握

どの学校でも児童の実態を共有する場があると思うが、本校では毎週1回全職員参加の「生徒指導・特別支援会議」を位置付けている。そこで発信される児童の課題や成長の様子を職員で共有した上で、それぞれの立場でのアプローチの仕方を考えたり、成長の様子を確認したりする場になっている。

私はこの会議の中で児童の発達や、成長の背景にあると思われる効果的な手立て等について発信するよう努めている。

#### (2)迅速な校内委員会の開催

校内で児童が不適應を起こしていたり、保護者からの相談を受けたりした担任から報告を受けることがある。このような場合には、その児童に関係が深い職員を集め、迅速に校内委員会を開催している。あるケースでは担任・養護教諭・管理職で、また別のケースでは担任・特別支援学級担任・管理職のように、出来る限り少人数で時間を空けずに開催する。これは児童への適切な指導・支援や、具体的な対応方法を保護者に示すことにより、不安

を軽減させることはもちろんであるが、誰がどのように指導・支援するのかについて道筋を立てることで、担任一人が抱えることのない体制作りを行い、安心感をもたせることも大きな目的と考えている。

### (3)校内巡回と職員へのフィードバック

校長が授業を巡回し、教職員や児童の様子を確認している。教職員の中には頻繁に校長が教室を参観に来ることに抵抗がある者もいる。教科指導に高い専門性がある管理職であれば、授業を参観し、その内容について適切な指導や助言ができるが、残念ながら私はその専門性は持ち合わせていない。そこで、私が授業を参観する際には、児童の良い方向への変化や授業に向かう姿勢、教職員の効果的な児童への関わり方を拾うようにしている。そしてそのことを職員室で話題にして児童の変化を共有し、その変化の裏に教職員自身が考えた手立てや工夫があったことが伝わるようにしている。大半の時間を一人で児童を見ている小学校教員にとって、その成長や望ましい変化を共有できる時間は、指導への自信を高めることにつながると考える。

### (4)一人一人のやりがいを高める役割分担

本校のような小規模校であっても校務分掌は他の学校と同様に存在し、一人当たりが抱える数は必然的に多くなる。教職員の負担を平等にするには、分掌の数を同数にすることが理想であるが、組織とはなかなかそのようにいかないのが現状である。

同じ教職員であっても一人一人の適性や経験は様々である。組織の力を最大限高めるためには、分掌の数こそ偏りはあっても、自分が学校経営に参画しているというやりがいと、誰一人欠けても運営出来ないという自己存在感がもてることが重要である。一人一人の適性を十分に

把握し、組織で自らの力が発揮できることによる自己肯定感を高めるために、常に教職員を見て、その業務の遂行に対して即時評価と感謝を伝えることを忘れないようにしている。

### (5)ボトムアップ型教職員集団の育成

組織ではよく、「ボトムアップ」と、「トップダウン」という言葉が使われる。いずれにも長所と短所が存在するが、私はボトムアップ型の組織づくりを目指している。教職員がお互いに意見を出し合った末の考えは、私の考えよりも優れた方向性になることが多い。

健全なボトムアップ型の組織になるように、教職員の中で信頼されるリーダーを育成するとともに、常に「お互い様」の意識をもって、職員間の風通しが良くなり、自ら考える組織のための働きかけを心がけている。

### (6)校長の役割の遂行

校長として大切な役割の一つが自分の考える学校づくりを校内外に発信することである。一人一人の違いを認め、適切な配慮と手立てで最大限の力を引き出す教育活動の場にするのを、学校だより等で保護者や地域に発信している。学校として何を大切にしているのか、その考えを明確にすることで、保護者は、他児との比較ではなく、わが子の成長に目が向けられるようになると考えている。

## 4 おわりに

私にとってこれまでの経験から得た特別支援教育の視点は唯一誇れるものである。これからのこの視点による学校づくりを継続したい。そして、「この学校で学んでよかった。」、「この学校で学ばせてよかった。」、「この学校に勤務出来てよかった。」と思ってもらえる学校づくりを目指したい。



## 子供たちと共に歩む学校を目指して



松戸市立高木第二小学校教頭 きたばやし まり 北林 真理

### 1 はじめに

「のびよ のびよ 麦の穂よ」これは本校の校歌の歌い出しである。80年前の創立当時、学校の周りに広がる麦畑の麦のように、強くたくましい子に育ててほしいという願いから、本校の学校教育目標は「ひとみ輝くむぎっ子～すすんで・げんきに・たくましい子の育成～」としている。

私が本校に着任したのは、コロナ禍真ただ中の令和3年だった。この2年間は、新型コロナウイルス感染症への対応に奔走する毎日であった。改めて、学校がすべての子供たちにとって生きる希望や夢を見出すことのできる場所であること、安心して過ごすことのできる場所であること、変化の激しいこれからを生き抜く力を育む場所でなくてはならないと感じた。

子供たちの未来を育む学校に必要なものは、教職員と地域の力の結集であると思っている。教職員一人一人が個々のもつ力を発揮し、地域との協働を図り、「子供たちのために」一丸となって教育が進められるように日々取り組んでいる。

### 2 職員と共に

#### (1)「聴く」ということ

職員室にいと、ひっきりなしに職員が声をかけてくる。そのたびに動かしていた手を止め、話に耳を傾ける。教頭という立場になるときにいただいたアドバイスを実行している。そうしてきたことによって、職員は、大

きな問題だけでなく、些細なことでも話しにきてくれる関係ができていないのではないかとと思う。些細な話の中に、早期に対応できる問題があったり、思いがけない情報があったりする。今後も「この人には、いつ何を言っても受け止めてくれる」「話してよかった」という安心感をもってもらえるような「聴く」を心がけていきたい。

#### (2)「聞き合う」ということ

一方で、聞き合える関係も重要である。職員同士が会話をすることで気づきが生まれたり、新しい発見があったり、意思の疎通が図れたりする。私のところに来る職員の話題を、あえて分掌担当やその分野に長けた職員に振る。職員同士がつながり、新たなネットワークが生まれる。また、聞き合うことは若年職員にとって貴重な学びの場となり、自身の指導の幅が広がり、先輩職員との関係性も向上し、同僚性を高める。聞き合うことのできる職員の様々な結びつきは、互いの信頼感を高め、風通しの良い関係づくりにつながり、職員室の良好な雰囲気は、そのまま子供たちのいる教室へとつながる。聞くことに価値を見出せる職員室となるように、私自身がためらうことなく聞くようにしている。

#### (3)信頼と感謝

教頭の仕事は、多岐に渡り、学校全体を視野に入れた業務になる。必然的に仕事の分だけ多くの担当や職員と関わることになる。しかし、それこそが職務を円滑に進めることにつながっていく。校内には、事務職員、養護

教諭、栄養教諭、技術員、スクールカウンセラー、日本語指導などの専門職員がいる。事務職員に予算について相談をすれば、よりよい計画の立案ができる。養護教諭にコロナ対策の進め方を相談すれば、よりよい方向性を導くことができた。どの職員も自身の役割に誇りをもつスペシャリストで、頼りになる存在である。個々の職員がもつ力を最大限に生かすことができるよう、職員同士を有機的に結び付けることができるよう努めている。

### 3 地域と共に

#### (1)地域の力を授業に生かす

本校の「むぎっ子」の由縁である麦畑は、残念ながら近隣には見られない。そこで「子供たちに本物の麦を見せたい」という思いから、農業に詳しい地域の人材を生かし「麦の会」を立ち上げ、平成28年、校庭の一面に麦畑をつくり、5年生の総合的な学習の時間の中で麦栽培を行った。麦栽培という貴重な体験活動からの学びは大きく、さらに生きた学習を体験させたいという思いから、平成29年、校庭の南東の一面に田んぼを造成した。これも、「麦の会」の方が中心になって行ってくださった。田植え、稲刈り、麦まき、麦踏み、麦刈り、脱穀、精米・製粉など、全ての行程で「麦の会」が地域の先生となって関わってくださっている。また、本校は自校給食であることを生かし、麦はすいとんに、米は米飯として全校児童に提供している。すいとん、米飯給食当日は、「麦の会」の方をお招きし、体験した学年児童と共に、一緒に食していただいた。この一連の貴重な体験を通して子供たちは、麦の強さに感動し、農作業の苦労や喜び、食べ物のありがたみ、日本の食文化への誇りなど、計り知れない学びをしている。季節や天候に関わるこの活動を円滑に進めら

れるよう、「麦の会」の方との連絡調整は欠かせない。また、支援をしてくださる機関を探したり、連携したりすることも大切な私の役目である。

#### (2)地域と共に安全を守る

本校には「高二小交通安全の日」が設定されている。これは、本校児童に起こった痛ましい事故を忘れないためである。

学区には、幅の狭い道路が多く、学校脇を車の往来が激しい県道が走っている。子供たちの登下校には心配な状況である。そこで立ち上がってくださったのが、PTAと見守りをしてくださる三つの地域団体である。子供たちの安全は、保護者と地域の方によって守られている。子供たちの見守りをして下さっている方々には、下校時刻を知らせる文書、地域の方には学校だよりを配付している。今年度からは、PTAが見守り隊と連携して、連絡を取ってくださるようになった。また、例年1年生が書いている見守り隊や110番の家へのお礼状も、PTAの方で葉書を準備し、投函までしてくださっている。こうした活動は、これまでの学校運営に根付く信頼関係で成り立っているのだと思う。今後も、温かな協力体制の継続に努めたい。「子供たちのために」動いてくださる保護者、地域の方々のおかげで、子供たちは今日も元気に登校することができている。

### 4 おわりに

私は今、担任時代には味わうことのなかった特別な時間を過ごさせていただいている。学校と保護者、地域が一体となって子供たちを育てることのすばらしさを目の当たりにしている。子供たちを支えるすべての方に感謝をし、さらに結び付きを強固にできるように尽力していきたい。



## 「学校全体で取り組む特別支援教育」の実際 ～特別支援コーディネーター、 特別支援学級担任の立場から～

浦安市立高洲中学校教諭 しゅう みえこ 周 美恵子



### 1 はじめに

本校は、浦安市内で一番新しい学校である。湾岸地区に位置し、マンションに囲まれている。教育熱心な保護者が多い一方で、海外で生活したことがある生徒や外国人を親にもつ生徒も多く、寛容な雰囲気がある。また、新しい街なので、バリアフリーを配慮した環境となっており、通常の学級に車いす使用の生徒や麻痺をもつ生徒が在籍していたこともある。自閉症情緒学級（以下8組と表記）には、現在5名の生徒が在籍している。

### 2 特別支援学級在籍生徒たちの声

どの学級でも同様かと思うが、8組の生徒は8組が大好きである。「個別に丁寧に教えてくれる」「自信がついた」など8組のよいところを実感しながら過ごしている。

しかし、その一方で、通常の学級の生徒から、「どうして特別支援学級にいるのか」とか、「楽でいいと言われる」などの声を耳にしたこともある。

### 3 「学校全体で取り組む特別支援教育」の重要性

市内の特別支援学級の先生方と話す中で、様々な悩みを耳にする。

「通常の学級の生徒は、特別支援学級についてどう感じているのだろうか。」「将来どのように社会で活躍できるだろうか。」「本人は、自分の障害をどのようにとらえているのだろうか。」など。

そのような生徒、そして担任を支えるために、「学校全体で取り組む特別支援教育」を

実践することが必要だと考える。

また、盛んに報道されているように、昨年末の文科省の調査で、通常の学級に在籍する児童生徒の8.8%に発達障害の可能性があると発表された。発達障害の可能性のある生徒にとって「受容的な雰囲気の学校、学級づくり」は大切である。また、共生社会の実現をめざす国の方針が打ち出されていることから、時代のニーズでもあると言える。

### 4 「学校全体で取り組む特別支援教育」に 取り組むポイント

#### (1)全校生徒に、特別支援教育について理解を促す機会を

私は学年開きなどの場面で、学年の生徒、またはクラスの生徒に特別支援コーディネーターとして話をする場面を設定している。

#### (2)交流及び共同学習を最大限に活用

どのように交流及び共同学習を進めていくのかを学校全体で共有していくことで、全校の職員を巻き込んでいくことが大切である。

#### (3)校長の理解とリーダーシップ

本校では、校長がリーダーシップを発揮してくださり、大変心強かった。常日頃から校長と密に話し合いをしておくとうい。

特別支援学級担任、特別支援コーディネーターが、校長とともに学校をつくっているという感覚になれるかどうかは、「学校全体で取り組む特別支援教育」を成功させる重要な要素だと感じる。

#### (4)学校評価アンケートの活用

自校の特別支援教育の浸透度について、数

値をもって評価することが大切である。その際に活用すべきなのが、学校評価アンケートである。その中に、特別支援教育の理解をどの項目で測るのかを計画しておくことが大切である。

本校では、「高洲中学校は、生徒一人一人を大切にしているか」という項目を毎年追って、特別支援教育の浸透度を確認している。

## 5 特別支援教育で見る高洲中の1年

本校の取り組みについて、以下に紹介していく。多岐に渡る実践のほんの一部であるが、参考にしていただきたい。

### (1) 1年間の始まりで何を伝えるか

年度初めには、特別支援コーディネーターとして、各学年の集会で話をしている。「誰もが安心して過ごせる社会をつくるためにできることについて考えよう。」「みんなが他者を受け入れる気持ちがあれば、温かい気持ちが広がっていく。」といった内容である。大切なことは、特別支援学級在籍生徒のこのみの視点で話をしないことだ。特別支援コーディネーターが、どんな学校にしたいかという視点を持ち、それを全校生徒に伝えていくことが重要である。

### (2) 生徒会活動に8組の生徒を巻き込む

本校では、8組の生徒を生徒会本部の「生徒会補佐」に選出している。本部の組織ということもあり、8組の生徒は誇りをもって、活動に取り組んでいる。

具体的な活動としては、行事の会場飾り付け、会場設営、募金活動の集計などの運営補助である。行事によっては、はじめの言葉、終わりの言葉を担当している。やるからには、全校生徒の気持ちを鼓舞できるような内容で立派な態度で発表しようと、8組生徒に指導している。文章と一緒に考え、暗記し、発表することが基本である。

また、部活動は、実態に応じて所属している。今年度は陸上部に2名、美術部に2名所属している。

### (3) 小学校から中学校へ安心して進学できるように

通常の学級から8組に入級したある生徒について紹介する。6年生の段階で、本人、家族と話し合い、8組への入級を決めたものの、今まで一緒に学習してきた友達はどう思うか心配……とのこと。そこで、特別支援コーディネーターが小学校に出向き、学年全体に話をすることにした。彼は、じっくり考えて安心して学習できる環境を選んだことや、みんなも中学校で困ったことがあったら、先生方に相談してほしいということを伝えた。本人は、笑顔で入学式を迎えることができた。



昨年度の合唱コンクール  
3年生のほぼ全員が有志として参加してくれた  
8組の合唱

## 6 おわりに

受容的な雰囲気のある学校づくりこそが、特別支援教育の浸透のためには不可欠である。そのためには、全校生徒にどのようにアプローチしていくのか、そして、そのために職員がどのように連携していくのかを考え、学校づくりを進めていく必要がある。また、生徒に活躍できる場がたくさんあるということは、生徒が自己肯定感を高めて成長していく上で、大切なことだということを忘れてはいけない。



## 命を守る防災教育授業

しまむら たくや  
鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校教諭 島村 拓哉



### 1 はじめに

近年自然災害が多発してきている我が国では、子供たちが自ら行う「自助」や「共助」の防災教育の大切さが必要とされている。とある研修の際にも、講師の話から、「いつまでも地元にいるとは限らない。大人になった時に海に近い所に住んでいるかもしれない。どんな所に住んでいても対応できるようにすることが大切。」と聞き、いつどんなことが起こっても災害に対応できる子を育てる必要があると強く感じている。しかし、実際の学校での防災教育は避難訓練の実施に留まるとい学校も多いだろう。だからこそ改めて、必要性を考えて実態に合わせた防災教育の充実を図っていくことが大切だと考える。

### 2 実践について

#### (1)実態把握

まず、子供たちの実態把握をするために、「各家庭で防災について話題があがったことがあるか」、「非常用持ち出し袋を用意しているか」というアンケートを実施した。すると半数以下の家庭は防災について話題に上がっていないと答え、持ち出し袋を用意している家庭は40%以下という結果になった。

このことから、家庭を取り込みながら防災への意識を高め、様々な場面で防災との関わりをもたせていくことが必要だと感じた。私は、教科等横断的な視点から教育課程を編成することが子供たちの防災への意識を高めていく一助となると考える。

#### (2)持ち出し袋の中身を考える

最初に、「持ち出し袋の中身を考えよう。」と課題を設定し、保護者参加型の授業参観で実践した。持ち出し袋がない家庭もあったので、班員と話し合いをしてその必要性を考えるようにした。内容は、身の回りにある物(下表)の中から八つ、バッグの中に入れる

軍手	ハサミ	箱アツツコ	缶づめ	缶切り	ローソク
メガネ	高価な指輪	通帳	サランラップ	電話	塩
雨具	家族の写真	化粧品	筆記道具	チョコ	ゲーム
下着	マスク	帽子	ビニール袋	ビタミン剤	常備薬
現金	ウエットティッシュ	紙コップ 紙皿	非常食	水2L	懐中電灯
携帯ラジオ	救急セット	ライター	電池	タオル	まくら
カイロ	SPカード ( )	SPカード ( )			

もの考えるというものだ。選択肢がある分児童が考えやすく、説明もしやすい。児童からは、後日持ち出し袋を用意しましたという嬉しい報告も届いた。

ゲーム感覚で、防災について興味関心を高めながら班で意見を進んで交流することができた。

#### (3)教科等横断的な学習

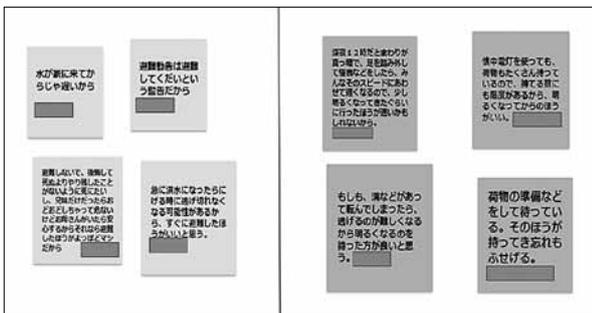
理科の「流れる水のはたらき」では洪水の動画を視聴して水の怖さについて学んだ。流水実験では、タブレットを活用して流れている水にカメラを近づけて洪水のリアルさを再現した。その他にも各教科で防災について話題を挙げていった。

#### (4)ALの授業 (アクティブラーニング)

ALを意識し、防災への意識を高めるために、テーマをもとに自分ならどうするかを考えるクロスロードを活用して授業を行った。

実際にあった事例を題材にし、ジレンマが生じる課題を提示したため、どの子も真剣に考えていた。今回は、「川沿いに住んでいて避難勧告が出た時に避難をするかしないか」というテーマで進めた。まずは自分で考えて意見を持ち、その後班で共有する活動をした。そうすることで様々な意見を聞き、どうすればよいかをより深く考えることができた。

また、本校では、ICTの研修も行っており、今回は、jamboardというアプリを活用して班ごとの意見を集約した。意見を大型提示装置に映し出し、他の班との考えの共有をわかりやすく行うことができた。



上図は実際に行った際の画面（左避難した方がよい、右避難しない）で、子供たちは、様々な考えが出たことでより悩みながらどちらにするかを考えることができた。

### (5)避難所再現訓練

避難所再現訓練では、東日本大震災の時に、実際に避難所の責任者を務めた方を講師として招聘した。この訓練を子供たちが行うにあたり、前日に講師から「被災してどう感じたのか」、「避難所で何が必要だったのか」、「どういう人たちが避難所を運営していたのか」など実際の体験をもとに話をしていただいた。

当日の避難所再現訓練では、8つのグループと避難者に分かれた後は、子供たちが自分たちで考えて動くことになる。それぞれに任されていることを行っていくことで、避難所が運営されることになる。

① 総務班	そうむはん
② 設営班	せつえいはん
③ 受付班	うけつけはん
④ 炊き出し班	だきだしはん
⑤ 物資班	ぶつしはん
⑥ 衛生班	えいせいはん
⑦ 情報班	じょうほうはん
⑧ 連絡員	れんらくいん
⑨ 避難者	ひなんしゃ

上図が避難所再現訓練の係一覧となっている。それぞれが効率的に動くにはどうすればよいか、一人当たりのスペースはこれぐらいかなど、子供たちは積極的に話し合いをしながら進めることができた。また、子供たちからの感想には、「実際に被災したらこうして動けばいいと具体的に考えることができた。」や「自分でできることを考えて動くことが大切だと感じた。」など今回の訓練を受けて防災への意識の高まりが感じられた。また、講師の方からもよく考えて動いていたという評価をいただくことができた。

### 3 おわりに

今まであまり防災について話題があがることがなかったが、実践を終えてから学校での友達同士の会話で自然災害が起きた時の話や避難訓練の反省など、話題に挙がるが多くなった。この様子を見て、防災への意識の高まりを感じた。しかし、日が経つごとに防災についての話題が減ってきていて、日常的に考える機会が減ってきていた。日頃から防災について関心を持ち、日常生活と、結び付けて考えることができるようになるためにも、今回行った研究や実践をもとに防災教育の充実を図っていきたい。

防災教育の終わりではなく、どんな時、どんな所でも「自助」と「共助」の行動がとれる子供の育成を目指してこれからも取り組んでいきたい。



## 多面的・多角的な考えを引き出す 道徳科の授業づくり



八千代市立みどりが丘小学校教諭 まえだ 前田 あや 彩

### 1 はじめに

2021年1月の中央教育審議会答申で、予測困難な時代において、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが重要とされた。多様な他者への肯定的な気付きや、多様な他者との協働を支えるものの一つに、他者とともによりよく生きるための道徳性があると考え。その道徳性を養うための道徳科授業の指導方法の工夫として、多面的・多角的な考えを引き出す方法について、実践から考えていきたい。

### 2 多面的・多角的な考えを引き出す工夫

#### (1)課題意識をもたせる

道徳科の教科書の多くの教材は、道徳的な事象や状況が記述されている。この道徳的な事象について意識をもたせることが大切である。例えば教材と同じような状況を思い起こさせたり、ねらいとする道徳的価値について自分の考えを見つめさせたりする。また家庭学習や読書活動の時間を使って教材を読み、自分なりの考えをもたせた上で授業を始める方法もある。そうすることで、児童が自分事として、教材や道徳的価値と向き合い、学習に向かうことができる。

#### (2)発問の工夫

##### ①様々な立場に立って考える

児童に多面的・多角的な考えをもたせる視点の一つとして、道徳的事象に関わる様々な人の存在がある。自分（主人公）、相手、周囲の人など様々な視点に立って考える事で、物事の状況を俯瞰して捉えたり、立場による認識の違いに気付いたりすることもでき、道徳的価値の理解が深まる。また、道徳科の学習を通して、多様な「ものの見方や考え方」を養うことができる。

##### ②時間軸を変えて考える

教材の中心場面や問題場面に対して自分事にすればするほど、「その時どんな気持ちだったか」や「どうすればよいか」など、考える時間軸が「今」になってしまう。そのため「このままにすると、主人公はどうなる？」など時間軸を過去や未来に移して考えさせることで、よりよい判断や、より深い価値理解に迫ることができる。

また、時間軸を変える発問を、授業の終末に行うことで、「よりよい未来」へのイメージがもてるようになる。例えば「こんな風に思ってくれる人が周りにいたら、どうかな?」「主人公のような考えの人がたくさんいる世界は、どんな世界だと思う?」などの発問で、道徳的価値のよさを改めて感じたり、「なりたい自分」についての思いをもたせたりすることにも繋がると考える。

### 3 授業の実際

#### (1)課題意識のもたせ方

「思い切って言ったらどうなるの」「良太のはんだん」（「ゆたかな心 小学道徳」光文書院）の授業では、導入で「よりよい判断に大切なものは？」というテーマ発問を行った。テーマ発問とは「教材のもつ主題やテーマそのものに関わってそれを掘り下げたり、追及したりする発問。」<sup>※1</sup>を指し、永田氏（2014）は、テーマ発問をすることで「児童は主人公の心情ではなく、自分自身の考えを直接主張する機会は多くなる。」<sup>※2</sup>としている。

またテーマ発問をすることで、授業を通して一貫した課題意識をもつことができ、その課題解決のために、多様な見方や考え方をすることの必要感をもつことができた。

#### (2)ワークシートと思考ツールの活用

前述した授業では、時間軸の移動について教師の発問から視点移動させるのではなく、ワークシートに「今」「未来」の言葉を入れ、それぞれに自分の考えを書き込めるようにした（図1）。

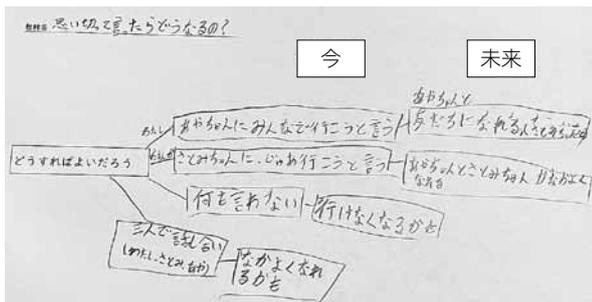


図1 時間軸の移動を意識させるワークシート<sup>※3</sup>

また、中心的な発問についてタブレット端末でロイロノートを使用し、思考ツールを自分で選んで考えた（図2）。ロイロノートを用いることで、それぞれの意見がすぐに共有でき、道徳ノートに考えを書いた児童も、ノートの写真を撮ることで、全員が考えを共有することができた。



図2 板書とタブレットを用いた話し合い

思考ツールを用いることで、道徳ノートに文章で自分の考えを書くことが困難な児童も意欲的に取り組み、また自分の思考に合わせたマトリックスやクラゲチャートなど様々な思考ツールを選んで考えを表していた。児童からは、思考ツールの活用で、自分の考えを様々な視点から捉えることができ、考えをもちやすかったとの感想が得られた。

### 4 おわりに

子供たちから多面的・多角的な考えを引き出すためには、まず指導者が多様な見方ができることが肝要だと考える。それは、教材分析の視点だけでなく、児童の発達段階や実態など、どのような方法がよりよいかを、常に考え試しながら今後も道徳科授業や道徳教育、さらに新しい時代に求められる「生きる力」を育むための教育に取り組んでいきたい。

#### 【参考資料】

- ※1 「考え、議論する道徳をめざして」永田繁雄 2016
- ※2 「道徳授業の発問を考える」永田繁雄 2014
- ※3 「多面的・多角的に考えよりよい自己決定につなぐ道徳科授業」山崎智子 2021を改変



学校で伸びる

## 失敗から学ぶ成長

八街市立交進小学校教諭 なら 奈良 ももか 百花



私は教員3年目になり、1年生を担当している。1年生は小学校の基礎になるため、学校生活のルールなどを細かく教えなければならない。初めての1年生担任だったため、上手く教えられるか不安があった。そして、実際に日々を過ごしていく中で、自分の指導力不足を痛感するようになった。そんな中、支えになってくれたのは、周りの先輩である。

ある先生は、「まだ3年目だから、できなくて当たり前だよ。」と言ってくださり、他の先生には、「こうしてみるといいよ」というアドバイスをいただいた。先輩は、自分の仕事もある中で、私の話を真剣に聞いてくださった。そして校長先生には、「子供たちが成長している部分もたくさんあるから大丈夫だよ。」という言葉を送っていただいた。私はそこでハッとした。私はできない子ばかりが気になって、頑張っている子に目を向けてあげられていなかったのだ。それからは、できないことではなく、一人一人の成長に目を向けられるようになった。

毎年、何かで失敗して落ち込んで、悔しい思いをしている。しかし、そこから学ぶことによって成長できていることも確かだ。学校とは、子供の成長の場だけではなく、教員も一緒に成長できる場だと思う。また、学校には素晴らしい先輩がいる。様々な先輩の実践を吸収しながら、自分に合ったものを見つけ、自分らしい教員を目指していきたい。



学校で伸びる

## ともだちっていいな

県立夷隅特別支援学校教諭 あだち 足立 なおゆき 侃介



私は教諭になり、今年で8年目となる。今年度受講している中堅教諭等資質向上研修Ⅰのテーマでは「子供の対話に焦点を当てた授業づくり」を設定し、研修を進めている。現在担任をしている小学部1・2年生は他者を意識し始めた児童、言葉での表出はないものの伝えたいという意欲が強い児童など、他者へ関心を寄せる姿が増えてきた。その「芽生え」を大切に、自分の気持ちや要求を表出したり、自分や他者の良いところに気付いたりできるように環境を整え、授業を工夫している。

対話を意識した授業の中で児童たちは言葉には出さずとも「あ、こうやってやればいいのか」「ほくも〇〇さんみたいに褒められたい」と友達の様子に目を向け、様々な方法に気付いたり、いつも以上に意欲を示したりする姿が見られた。教師と二人だけでは気付くことができない学びが数多くあり、小学部にとって友達との対話の大切さを改めて感じた。

学習や生活の中での「なぜ? どうすれば?」という課題に対して、答えをそのまま教えるのではなく、教師や友達との対話の中で気付き、考え、解決しようとする力を引き出すことができるように環境の設定や授業の構成、言葉かけ一つ一つを見直し、PDCAサイクルを意識しながら改善に努めたい。また、対話的な学びにおいて児童の視点と教師の視点を整理し、双方のつながりのある授業を展開できるように尽力していきたい。

## 子供主体の教育・保育への一歩

市原市八幡認定こども園園長 さいとう 齋藤 じゅんこ 純子



### 1 はじめに

市立幼稚園、市立保育所の再編成計画により、こども園がスタートし5年が経った。本市では就学前の教育・保育を一体的に捉え、一貫してより質の高い教育・保育を提供するために、市立幼稚園は閉園。そして、市立保育所を段階的に認定こども園に移行し、市立幼稚園の機能を統合することになった。職員は、幼稚園教諭と保育士免許のどちらも取得し、保育教諭として、幼児期の教育・保育を総合的に実施している。

### 2 遊びと「環境」

4月、異年齢の関わりや、遊びの広がり・深まり、経験させたい遊びについて、「環境」に着目し園内研修がスタートした。自然に異年齢の交流を深め、自由に遊びを楽しめる戸外に焦点をあて、子供の姿を振り返り、記録し、経験させたいことや、子供の育ちや学びについて研究することになった。

保育教諭の計画によって、様々な遊びが展開されるが、各クラスや年齢の活動となってしまう異年齢の関わりにつながらない。遊びの体験からの学びはあるものの、育てたいものは他にもある。子供の姿から、学ぶことが多くある。保育教諭同士のつながりが、子供の遊びをつなげる。対話を生み、他児への理解につなげる。豊かな経験は、心の育ちとなる。そして次の遊び（学び）になる。

少しずつ、子供の遊びが変わり始めると、園庭から子供たちや保育教諭の楽しそうな姿やワクワクが伝わってくる。そんな時は、嬉しくなって、こちらまでワクワクする。



### 3 子供主体の教育・保育へ

#### (1)こども会議（5歳児）

初めての会議は遠足について、どこに行こうか、子供たちと話し合った。全員が納得するまで待つことにした。あれこれ時間はかかったが、自分たちで決めたことに満足そうで、子供たちが輝いて見えた。意欲的に様々な事に参加し、楽しめるように、子供たちが考えて決めることを大切にしたい。

#### (2)サークルタイムのすすめ

サークルタイムとは、子供たちが輪になって座り、対話や意見交換を行う活動のこと。

子供達は自分の考えや感じたことを自由に表現する。友達と共感したり、自分とは違う考え方や経験に触れたり大切な活動になっている。子供たちが友達の仕草や表情から気持ちを読み取る姿が見られたり、発言が多くなったり、子供たちの成長や学びにつながっている。

### 4 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」をどう捉えるか。子どもの姿を振り返り、育ちや学びを見つめ、語り合える職場づくりに努めたい。

国語

## 読者反応を高め考えを形成する力を育てる 読書指導に関する研究

-リテラチャー・サークルやオンライン読書紹介を通して-

横芝光町立光小学校教諭（前横芝小学校教諭） はやかわ ゆうま 早川 祐真

国語科の読むことの学習指導では、教科書教材を中心とした読解技術の習得に重きがおかれ、読書活動を充実させ読者反応を育む指導が十分ではないという問題がある。そこで、本研究では、小集団での読書活動、児童の読書実態をふまえ、カリキュラムとして考えた読む本の選書、児童中心の読書コミュニティづくり等の授業を通して、読者の本を読んで反応する能力を高め、読書生活を豊かに営む態度を育むことを目指した。リテラチャー・サークルによる読書活動やオンライン等による読書紹介を行った結果、主体的に読書に取り組む態度が認められ、読者反応が高まり、考えを形成しながら読む力を育むことができた。今後も地域図書館との連携を深め、地域の読書活動を推進していきたい。

社会

## 地域に見られる社会的課題の解決を目指した学習活動を通して、地域社会の一員としての自覚を養う社会科学習

白井市立清水口小学校教諭（前印西市立いには野小学校教諭） おおかわ まさと 大川 征人

令和4年度全国学力・学習状況調査の結果から、「人の役に立ちたいが、実際に地域や社会をよくするために考えることは少ない」という児童の実態が明らかになった。変化の激しい現代社会において、身の回りにあふれる社会的課題の解決を目指そうとする意識、ひいては地域社会の一員としての自覚を養うことは重要である。本研究では、文化財の保存・継承という社会的課題を自分事として捉え、文化財との関わり方を考えさせることを通してそのような自覚を養うことを目指した。

社会的課題を取り上げた学習活動による地域社会の一員としての自覚を養うことの有効性について、研修会等で県内の先生方に広めていくとともに、今後も追究していきたい。

算数

## 統計グラフを読み取る力を育成するための指導の在り方

-グラフのかきかえ、問題作成、問題解決の学習活動を通して-

一宮町立一宮小学校教諭（前白子町立関小学校教諭） よしはら しんじ 吉原 慎司

日常生活の中には、誤解が生じやすいグラフが用いられている場合があり、児童はグラフを一面的にしか捉えず、情報を誤って理解することがある。そこで本研究では、第5学年、第6学年において、誤認しやすいグラフを正しく読み取る力を育成することに焦点を当てた単元を新設し、「グラフのかきかえ」「問題作成」「問題解決」という一連の活動を設定し、検証授業を行った。その結果、1目盛りの大きさや縦軸の範囲を変える活動は、グラフの形にだけ捉われることを防ぎ、誤認しやすいグラフを正しく読み取ることに有効であることが分かった。今後は、本研究で得た成果を研修会等で周知していくとともに、どの教員も授業で活用できるよう内容の改善に努めたい。

理科

## 小学校4年「空気と水の性質」における 質的・実体的な見方を育む理科授業

船橋市立薬円台小学校教諭（前高根東小学校教諭） まつした いおり 松下 伊織

“見方が育まれれば、見えるものが増えて世界がもっと楽しくなる。”という思いから、物事を捉える視点である「理科の見方」を育みたいと考えた。

本研究の目的は、児童に「理科の見方」における、物質ごとの性質やその変化を捉える『質的な見方』と、見えないけれどもあると捉える『実体的な見方』を育むことである。そのための手立てとして、①見方を意識付けること、②粒子概念を用いて考えさせること、の2つが有効であることがわかった。

このことから、小学校4年「空気と水の性質」の授業において、教員は上記2つの手立てを実践し、『質的な見方』と『実体的な見方』を育むようにしてもらいたいと考える。

音楽

## 思いや意図をもって表現し、主体的に学ぶ児童の育成 -音楽づくりにおける音・音楽の「可視化」を中心に-

船橋市立金杉台小学校教諭（前咲が丘小学校教諭） さとう まいこ 佐藤 麻衣子

児童が自ら「音楽表現を工夫してみよう」と意欲をもてるような主体的な学びを促すためには、音楽を形づくっている要素などの働きや、それら进行操作する方法を理解させる必要があり、音や音楽の「可視化」による具体化が理解の支えになると考えた。本研究では「視覚と聴覚の両面から音楽を捉えることができる」というICTの利点を生かし、小学校第5・6学年の音楽づくりにおいて音楽作成ソフトを用いた可視化を行った。検証を通して、可視化が理解や思考整理の支えとなること、協働的な学びを促すことが明らかになった。今後は、本研究で得られた成果を広めるとともに、対象や領域を広げることで、児童が思いや意図を表現する上での「可視化」の有効性について追究し続けていきたい。

体育

## ネット型の学習内容と学習過程の系統性の検討 -キャッチバレーボールにおけるオーバーハンドパスを簡易化した動きを手掛かりに-

松戸市立東松戸小学校教諭 きむら あきひと 木村 昭仁

本研究では、中・高学年を対象として、キャッチバレーボールにおいて、トスアップにオーバーハンドパスを簡易化した動き（肩より上から上げるトス）を取り入れた。その結果、4年生では、三段攻撃を成功させるために、オーバーハンドパスを簡易化した動きによるオープントスが有効であること、6年生では、クイックトスがブロックをかわすために有効であることに児童が気付くことができた。以上のように、児童らはトスの有効性に気付くとともに、知識及び技能を習得し、思考力・判断力・表現力を高めることができた。これには、「指導の個別化」と「学習の個性化」の考え方を取り入れた学習過程が有効であった。今後は、縦断的に検証を進めていくことで経年的な変化過程にも迫っていききたい。

## 現代的教育課題

## 日本語能力に課題がある生徒への指導の工夫 -「JSLバンドスケール」を活用した授業の改善を通して-

木更津市立鎌足中学校教諭（前袖ヶ浦市立蔵波中学校教諭） はぎはら さおり 萩原 沙織

日本語支援が必要なJSL生徒は全国で増加中だが、居住地域が散在する市町村では日本語指導教員が不足している。加配があっても全てを取り出し授業にできないため、今後はどの教員でもJSL生徒の学習言語能力を把握できるスケールが必要だが、あまり普及していない。また能力に応じた個別最適な支援ができていない。加えて、国語科ではJSL生徒がもつ文化の多様性を生かすような授業がなされてこなかった課題もある。これらを解決するため、「JSLバンドスケール」でJSL生徒の日本語の発達段階を把握し、個別最適な支援を古典の授業に取り入れた結果、異文化を生かした授業を展開することができた。今後は研究で得た成果を研修等で提案したり、情報を発信したりしていきたい。

## 言語障害

## 言語発達に課題のある児童の言語表現力を高める指導 -LCSAに基づく支援の検討-

市原市教育センター指導主事（前五井小学校教諭） やまもと ともこ 山本 朋子

言語障害通級指導教室にて通級による指導を受けている言語発達に課題のある児童の傾向として、ことばで表現することの苦手さと活動への抵抗感を感じていた。そこで、言語表現力向上への適切な支援について明らかにするため、LCSAの結果から指導の目標と方針を設定し、言語障害通級指導教室と通常の学級における支援を実施した。その結果、児童は自立活動で自分に適した学習方法を身に付け自信をもつことで、通常の学級でも進んで考えを表現できるようになった。実践を通して、LCSAをアセスメントに用いる有効性と、双方の担当者が児童の実態と課題、支援の手立てを共有し、指導に生かす連携の重要性が確認された。今後は地域の研修会等に積極的に参加し、成果や情報を発信していきたい。

病弱・身体虚弱、  
重度・重複障害

## 病気の子供の学びをつなぐために

### -不安を安心に変える復学支援の在り方について-

県立四街道特別支援学校教諭 はらだ ゆり 原田 友里

病気の子供の学びの場は通常の学級を含め多様であり、それぞれの場で教育的ニーズに応じた支援・配慮が求められている。病弱教育を担う学校の教員と小中高等学校等の教員を対象に調査を行った結果、学校種間における教育的ニーズの捉え方には差異があり、その支援・配慮の視点の共有が課題となった。そこで、具体的な支援方法や配慮事項を細やかに共有でき、継続的な支援につながる復学支援ツール（試案）を作成した。また、入院中の教育は学習の遅れを補完するだけでなく、教員の関わりが子供の心の安定にとって重要な役割の一つであることが明らかになった。今後は、支援ツール（試案）の検討、活用をとおして病気の子供の学びが切れ目なくつながるよう復学支援を行っていきたい。

## インクルーシブ教育

## ICTを利活用した居住地校交流の在り方について

## -小学校と特別支援学校の実践を通して-

きのみした たけはる  
 県立栄特別支援学校教諭 木下 武治

特別支援学校に通う児童生徒にとって、居住地校交流は地域の友達と関わる貴重な機会である。研究では、ICT機器を利活用することによって、教員や保護者の負担を減らし、児童生徒の実態に応じて様々な交流ができる環境を作っていきたいと考えた。内容としては、ICTを利活用した小学校と特別支援学校の居住地校交流について、授業実践、インタビュー調査を実施し、成果と課題について明らかにした。また、ICTを利活用したPDCAサイクルに沿った居住地校交流の効果的な進め方について検討し、「ICTを利活用した居住地校交流サポートシート（試案）」を作成した。このサポートシートを活用することによって、ICTを利活用しながら、教員同士が協働・連携して居住地校交流を進められるようにしたい。

## 特別支援教育課題

知的障害特別支援学校における理科や  
社会科の評価方法について

もとみや く に ひこ  
 県立香取特別支援学校教諭 本宮 久仁彦

知的障害の実態の幅が広い生徒集団に対する、理科や社会科の一斉指導において、目標に準拠した評価を行うために、単元ループリックと単元ループリック作成の手順の開発を行い、単元目標の明確化や、学習評価と授業改善からなる単元における指導と評価の一体化を図式化した。生徒の知的能力の実態別グループごとに、評価方法や目指す生徒の姿、具体的な言動を明確にすることで、学習評価と授業改善を行うことができ、単元ループリック作成の手順と、それに基づいた単元ループリックの有効性を示すことができた。今後の実践を通して、学習評価と授業改善の一層の充実に努め、研究の成果を生かして生徒が「分かった」と思える授業づくりに取り組んでいきたい。

## 企業等派遣

派遣企業における  
組織マネジメントの手法の追求

わかうめ たかひろ  
 横芝光町立上堺小学校校長（前山武市立大平小学校教頭） 若梅 孝篤

令和2年3月から始まった臨時休校。新型コロナウイルス感染拡大防止のための措置として取られた緊急事態宣言により、社会生活や学校生活は大変な苦労を経験した。リモートワークやテレワークといった新しい働き方が生まれる中、対面での接客により成り立つホテルポートプラザちばの損失は大変大きなものであった。ようやく社会も落ち着きを取り戻しつつある昨今、宿泊業を始めとする観光業界も徐々に活性化しつつある。お客様に安全安心なサービスを提供するための日々の企業努力や組織マネジメントは、学校経営に通じるところが多分にあった。「人にしか成し得ないサービス」を提供するホテルでの研修を参考に、「人にのみ成し得る教育」を行っている学校組織の活性化に生かしたい。

# 自ら学び、互いに高め合う児童の育成 ～情報活用能力を生かした学びを通して～



船橋市立二宮小学校教諭 にしかわ こうたろう  
西川 幸太郎

## 1 はじめに

本校は、令和3年度から船橋市の研究指定校として、ICTの効果的な活用方法の検証に取り組んでいる。研究指定1年目では、「すぐにでも・どの教科でも・誰でも」生かせる1人1台端末にすることを重点に研究を進めた。そこで研究指定2年目には、学習の基盤となる資質・能力である情報活用能力を生かした学びの在り方をテーマとして研究に取り組んだ。児童が身に付けた情報活用能力を生かして自ら課題に働きかけ、多様な他者と協働しながら学びを深めていくことは、本校の目指す児童の姿につながると考え、研究主題を設定した。

以下、研究主任として取り組んだ研究指定2年目の実践について紹介する。

## 2 研究の実際

研究指定2年目は、各学年及び特別支援学級での実践、遠隔教育・遠隔授業の推進を取組として挙げ、校内研究を推進した。

### (1)各学年での授業実践

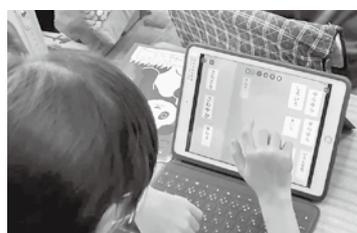
#### ①1学年（国語科「おはなしどうぶつえんをひらこう」）



紹介カードを作る際、内容によってロイロノートのテキストを色分けしたことが効果的

だった。単元終了後にも、友達の紹介カードに興味を示し、読書の幅を広げる児童の姿が見られた。

#### ②2学年（国語科「短い言葉で」）



情報を集める手段として「くま手チャート」の活用が効果的だった。テキス

トを自由に動かせる利点を生かし、語を並び替えたり、複製したりして何度も試行錯誤しながら詩作りに取り組んでいた。

#### ③3学年（国語科「絵文字リーフレットを作ろう」）



整理・分析する場面の意見交流の際にロイロノートの色分けされたテキストを活用したことが

効果的だった。また、ロイロノートの資料箱に用意したヒントカードを児童が必要かどうかを判断しようとする姿が見られた。

#### ④4学年（社会科「地しんからくらしを守る」）



学校に持ってくることができない防災グッズや設備は、画像として共有させた。具体的なイメージをもちながら考えさせることができ、

社会的な見方や考え方を働かせて必要性を判断しようとする姿につながった。

### ⑤5学年（理科「流れる水のはたらき」）



ロイロノートの提出箱機能を活用し、考察をクラウド上で共有できるようにした。同じよう

な気付きでも表現が異なる場合があり、児童同士に自然と対話が生まれ、より納得感のある考察へと練り上げることができた。

### ⑥6学年（社会科「武士の世の中へ」）



1人1台端末をモニターとして活用し、児童の考えを伝えさせる手立てが有効だった。発表

をまとめる場面では、よりよくするための視点を電子黒板で示したことで、どのグループも活動の目標を意識して学習に取り組むことができた。

## (2)特別支援学級での授業実践

### ①自閉症・情緒障害特別支援学級

自立活動「人とよりよく付き合うためには」



ロイロノートでワークシートを配付し、自分の表情を可視化

させることができた。全体共有では、気付いたことを電子黒板上にかき込み、生き生きと意見を交流する姿が見られた。

### ②知的障害特別支援学級

算数科「買い物をしよう～お金の使い方～」

1人1台端末を活用し、どの児童も簡単に



買い物リストを作ることができた。写真付きのリストを作ったことで、買い物をする場面で

は、商品を探しやすくなり、意欲的な学習態度につながった。

## (3)遠隔教育・遠隔授業の推進

### ①オンライン通級における吃音の指導



共有ノート機能を使って授業を進めた。思考ツールを活用し、各自の吃音について客観的

に振り返らせることができた。

### ②感染症による自宅待機者の学びの継続

全学年・学級においてオンライン授業を実施した。グループ学習にオンライン上で参加したり、全体共有で発表したり、専科授業にも参加できるようにしたりと通常の授業と変わらずに参加できるよう努めた。

## 3 おわりに

研究指定2年目は、ICTの利点を吟味し、より効果的な場面で活用できるようにすれば、本校の教育目標である「自ら学ぶ子」の育成につながると考え、実践を積み重ねたことが大きな成果だと感じている。

しかし、常に意識しなければいけないことが、ICT活用を目的化しないことである。本校では、1人1台端末を文房具と同様のツールにすることを目指している。

今後も児童の学びを広げ、深めるためのICT活用について、児童と職員が一体となった教育活動を推進していきたい。



## 休日開放事業／教育講演会のお知らせ 「発達障害の子とハッピーに暮らすヒント」

県総合教育センター特別支援教育部

### 1 はじめに

休日開放事業／教育講演会（以下、「本講演会」という。）は、特別支援教育における今日的課題を取り上げ、その理解や対応等について学ぶことで教職員の資質・能力の向上等を図るものである。併せて県民の皆様に対し、特別支援教育に関する啓発を図ることも目的とする。

### 2 今年度の取組



昨年度の、文部科学省の調査で、通常学級に在籍する小中学生について、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面に著しい困難を示す割合は8.8%であった。児童生徒の学習面や行動面の困難さ

に対する理解は広がってきたが、今後、一人一人に応じた支援策の充実が求められる。

こうした状況を踏まえ、今年度の本講演会の演題を「発達障害の子とハッピーに暮らすヒント」として、講師に「ゆるみ☆子育て」代表である堀内祐子氏をお招きする。堀内氏は、発達障害のある4人の子の母親。子育て中、通信制の大学で発達障害や心理学について学びながら自閉症スペクトラム支援士等の資格を取得。その後、自身の経験を基に2006年から全国で講演活動を行う。子供の育てにくさや問題行動に悩む保護者や教職員へ向けた具体的かつ実践的な対応方法が聞けることを期待する。

本講演会のメインテーマは、「一人一人が輝く共生社会の形成に向けて」である。障害の有無に関わらず、誰もがその能力を発揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りをもって生きられる社会の在り方について広く考えていきたい。

#### 【講師：堀内 祐子 氏（略歴）】

発達障害のある4人の子の母親。自閉症スペクトラム支援士、傾聴心理士、特別支援教育士の資格を取得し、自身の経験を基に全国で講演活動を行う。他に、ジョブコーチ、放課後等デイサービスの指導員、障害者のヘルパーとして幅広く活動する。これまでに、4冊の著書がある。



#### 【本講演会の開催期日、申込方法等】

- 期 日 令和5年11月25日（土）
- 時 間 午後1時30分～午後4時
- 定 員 130名（受付：午後1時～）
- 場 所 県総合教育センター 大ホール
- 申込み 電話、メール（先着順）
- ※手話通訳等が必要な方は、申込みの際にお伝えください。
- ※メールでのお申込みは、①氏名②所属③当日、連絡可能な電話番号を御記入ください。
- ※Zoomでの視聴を希望される方は、添付ファイルを受信できるメールアドレスをお知らせください。
- 締切り 令和5年11月22日（水）
- 申込先 県総合教育センター特別支援教育部  
TEL 043-207-6023  
E-mail sosetokusi@chiba-c.ed.jp

## オランダとの文化交流事業「テオ・ヤンセン展」

令和5年10月27日（金）～令和6年1月21日（日）

県立美術館

東京2020大会のレガシーとして、千葉県がホストタウンとなったオランダとの文化交流を深めるため、千葉県立美術館では、オランダの世界的アーティスト、テオ・ヤンセンの特別展を開催する。

### 1 テオ・ヤンセンとは

テオ・ヤンセンは、1948年にオランダ・スフェベニンゲンで生まれた。デルフト工科大学で物理学を専攻したのち、アーティストに転向。1990年より、風力で動く「ストランドビースト」の制作を開始し、芸術家、発明家、科学者の顔を持つ「現代のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と称される。

### 2 ストランドビーストの魅力

代表作「ストランドビースト (strand beast)」は、オランダ語で「砂浜の生命体」という意味で、プラスチック・チューブや粘着テープなど身近な材料を組み合わせ、物理学による計算に基づいて作られた、風の力で砂浜の上を歩く生命体だ。

この作品は、故国オランダの海面上昇問題解決のために作られたという。海面上昇にもなって国土の縮小が進むオランダの砂浜に生命体を放ち、砂をほぐして砂丘を積み上げさせることで面積を保つというものだ。

まるで生き物のように、動き、繁殖し、そして進化するストランドビーストは、科学と芸術という既存のカテゴリーを自由に横断する。

### 3 展示と関連イベント

本展では、約10体のストランドビーストの展示に加え、テオ・ヤンセン氏の道具やアイデアスケッチ、試作段階の作品なども公開する。

「リ・アニメーション (再生)」と称して、千葉みなとの海岸沿いをストランドビーストが歩行するイベントも開催予定だ。また、館内でストランドビーストを歩行させるイベントも毎日実施する。

実際に動いて迫り来るストランドビーストの迫力をぜひ間近でご覧いただきたい。

また、自分で作れるミニチュア模型「ミニビースト」なども販売。自分で組み立てたストランドビーストが、実際に風を受けて歩く姿が楽しめる。

大人も子どもも夢中になる県立美術館の「テオ・ヤンセン展」、ぜひ楽しみにお待ちいただきたい。



ストランドビーストを動かすテオ・ヤンセン

## 千葉県誕生150周年記念 企画展「はかる」

令和5年10月14日（土）～12月3日（日）

県立現代産業科学館

『「はかること」は文明の母である』ともいわれており、いつの時代にも、「はかる」は科学や産業、文化の礎として欠かせない役割を果たしてきた。その技術は多様で奥深く、私たちの毎日の生活は、驚くほど沢山の「はかる」に支えられている。

今秋の県立現代産業科学館の企画展では、私たちの生活を取り囲む「はかる」について、馴染みのあるものから、普段はあまり見ることのない最新の製品まで広く紹介する。はかる視点から身の回りの科学技術や産業に目を向けると、きっと新たな発見が待っているだろう。

### 1 単位と「はかる」

私たちは単位と道具を使い、ものの長さや重さ、量、そして時間を正確に表すことができ、他の人と共有することができる。公平にものをはかったりくらべたりするとき基準となる量である長さや重さ、体積等を視覚化し、誰もが体感的に捉えることができるように展示する。

### 2 身体を「はかる」

私たちにとって、最も身近なはかる対象が自分自身の身体である。個人の健康状態の把握や体調管理を目的に、家庭用として開発された初期の体重計や体脂肪計、最新の体組成計について紹介する。また、健康意識の啓発を目指して、新たな視点から開発された推定野菜摂取量をはかる最新の製品についても、一部体験を交えて紹介する。

### 3 暮らしの「はかる」

住まいや食、自動車に関連することを中心に、くらしや各種産業にまつわる計測機器やはかる道具について紹介する。ガソリン計量機や量り売り機器、市川市で製造されている浮ひょうやガスメーターなどを取り上げ、一部の製品・道具については、製造工程等ものづくりの現場も紹介する。

### 4 地球環境を「はかる」

私たちの生活に大きな影響のある気象・災害に関連する計測機器について紹介し、実際の撮影画像と併せて展示する。また、環境保全につながる「はかる」として、pH計や水中音響計測装置といった水質調査や海洋研究・調査に関する計測機器や技術について紹介する。

### 5 「はかる」への挑戦

地道なはかることの積み重ねから、ものづくりや最先端の研究に携わっている県内の工業高等学校や理工系大学、千葉県計量検定所などを取り上げることにより、キャリア教育としても役立つ展示となっている。また、「地球をはかる」ことに情熱を注いだ、県内出身の偉人である伊能忠敬について、関連する測量器具の模型や絵図を展示し、その功績について紹介する。



学習支援パートナーロボットOvot  
協力：学校法人日本大学 生産工学部

## 千葉県誕生150周年記念 「写真で見るちばのあゆみ」パネル巡回展

県立中央博物館

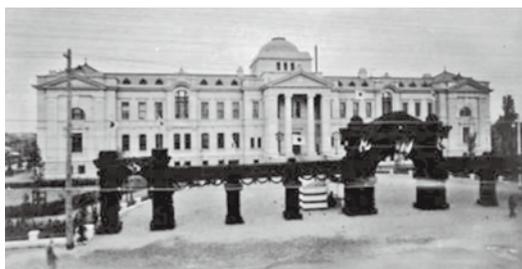
明治6（1873）年6月15日に当時の木更津県と印旛県が合併して千葉県が誕生し、令和5（2023）年で150年に当たる。

県立中央博物館では、これを記念して、明治から令和までの政治や産業、文化など様々なできごとを写真で振り返るパネル巡回展を、県内各地の施設で開催している。

### 1 150年のあゆみを写真で振り返る

この展示では、14のテーマ・68点の写真で、明治から令和までのあゆみを振り返る。

明治～昭和中期のパネルでは、初代県令・柴原和の肖像写真から始まり、交通網の整備や産業の発展、県民生活の変容など、千葉県が誕生し近代化していく様子を、貴重な古写真や絵はがきで紹介している。



明治44（1911）年に竣工したルネサンス様式の県庁舎

戦後のパネルでは、戦後の復興から、工業県・観光県・東京のベッドタウンという現在の千葉県の姿が形成していく過程や、まだ記憶に新しい平成・令和のできごとまでをたどることができる。

このほか、県内各地域を取り上げたパネルも展示する。

150年の歴史の中で、写真がないために紹介できなかったできごとも多い。展示を通じて、歴史

を考えるための資料としての写真の重要性を知っていただくとともに、続いていく未来（100年後）には、どのような写真が紹介されるのか、その姿にも思いを馳せる機会にさせていただきたい。

### 2 県内各地を巡回

この展示は、来年6月頃まで県内各地の施設を巡回する。ぜひ近くの会場でご覧いただき、学校教育等でもご活用いただきたい。なお、最新の巡回の情報は、県立中央博物館ホームページに掲載している。



### 3 ふるさとちば古写真デジタルアーカイブ

さらに、県民から県の歴史を伝える古写真を募集し、博物館が所蔵する写真とあわせて特設サイトで公開している。

年表形式で歴史をたどる、過去と現在の写真を見比べるなど、さまざまな利用が可能なほか、サイトに掲載されている写真は、教育・研究活動等の素材として、無料でダウンロードして使用することができる。

千葉県誕生150周年を記念する今年、ぜひ教育現場でもご活用いただきたい。

#### 【特設サイト】

<https://150photo.pref.chiba.lg.jp/>

## 千葉県特別支援学校作品展 ～ちば特別支援教育フェア2023～の開催について

さわやかちば県民プラザ

### 1 はじめに

さわやかちば県民プラザでは障害者週間（令和5年12月3日～12月9日）に合わせ「千葉県特別支援学校作品展～ちば特別支援教育フェア2023～」を令和5年11月29日から12月6日まで開催します。このイベントは、特別支援教育の推進に向けて特別支援教育及び特別支援学校について広く県民に対し理解・啓発を図るとともに、児童生徒が作品を発表する場とし、県民と特別支援学校に通う子供たちとの触れ合いを通して、共生社会への一助としたいと考えています。

### 2 イベントの内容

#### (1)作業製品の販売

コロナ禍でここ数年実施できなかった作業製品の販売を実施する予定です。

#### (2)学習の作品展示

昨年度は特別支援学校17校による作品展を開催しました。児童生徒の作品は1000以上に上り色彩鮮やかな作品からダイナミックな共同作品まで多数の展示がありました。

#### (3)学校紹介パネル展示

各学校で、特色や魅力づくりのための取り組みや学校概要をまとめた情報発信ツールを作成しています。作品展開催中は、それらを展示しています。

#### (4)特別支援教育関連情報コーナー

当所ホームページ内に『障害者の学びサイト「学び」で輝く!』を掲載しています。この中に当所で作製した学校卒業後における生涯学習動画をアップしています。動画の内容は料理、運動、音楽、学習、ものづくりで、現在18本あり、この動画を作品展開催中は会場で上映します。

\*当所ホームページからもご覧いただけます。→



昨年度の期間中は延べ500名を超える方が来所し、作品等を鑑賞されました。多くの方々が特別支援学校の活動に触れ、特別支援教育について考える機会や子供たちの生き生きとした作品に囲まれ、心温まるひとときとなりました。今年度もたくさんの方の来所をお待ちしております。

### 3 お知らせ

当所にて11月30日（木）県内市町村教育委員会生涯学習・社会教育課職員、NPO団体、公民館職員を対象にした「障害者の学び研修会」を開催いたします。今年度は多方面からゲストをお招きしてシンポジウムを開催予定です。興味のある方は奮って参加ください。

○お問い合わせ

さわやかちば県民プラザ事業振興課

☎04-7140-8615

(昨年度の展示)



作業学習での  
製品作り



美術の学習で  
描いた自画像

## ICTを活用した働き方改革 ～仕事の負担軽減にむけて～

成田市立三里塚小学校校長 村田 まさし 正志



現在、どの学校でも「職員室で仕事をする」イコール「コンピュータやタブレットに向かうこと」になっていることだろう。

コンピュータで効率よく仕事をこなすためには、ショートカットキーや差し込み印刷などの個人のスキルを高める必要がある。しかし、今までの経験上、全ての職員のスキルを同じように高めることは不可能である。

スキルの異なる集団が、今以上に効率よくコンピュータを活用し、一つの仕事にかかる時間やコンピュータに向かう時間を少しでも短縮することができれば、働き方改革の一助となるのではないかと考える。

### 本校の実践

本校では、次の3点を重視して、業務の効率化を図る工夫をしている。

- ①同じデータ入力を二度しない。(データを共有する)
- ②繰り返し行う作業を自動化する。
- ③一人一人が作成したデータを自動的に集約する。

### 具体例1 児童データベースの作成

校務支援システムにもデータベース機能があるが、カスタマイズすることが難しいため、独自のデータベースを作成している。住所や保護者、兄弟などの児童名簿のデータ以外に、様々な情報を記録し、職員が閲覧できるようにしている。また、表計算形式に書き出す機能を使って、各種名簿(学級・地区・ク

ラブなど)や引継資料が簡単に作成できるようになっている。(①③)

### 具体例2 出欠席統計の半自動化

今までは、校務支援ソフトで出席簿を作成し、それをもとに表計算ソフトに欠席数と欠席理由を入力、ワープロソフトで督励簿を作成、担当者は全校分を集計するといった作業を行ってきた。

作業工程が多く、転記ミスなどもあり、毎月末に時間がかかる作業であった。

これを校務支援ソフトのデータをそのまま転用し、表計算ソフトで自動的に集計し、そのソフト内で督励簿も作成できる工夫を行った。欠席数のカウントや報告対象者の自動抽出等が行われるため、ミスが大幅に減少すると同時に、担当者もボタン一つで報告書を完成させることができるため、作業効率がアップしたと感じている。(①②③)

### 具体例3 職員名簿作成の自動化

毎年、年度初めに勤務状況一覧や職員一覧など、職員の名簿に関する提出物がたくさんある。昨年のデータを活用しようにも、年齢や親族の記述など毎年変化する内容があり、そう簡単にはいかない。

しかし、今後一年間のことを考えると、ここで正確な職員の名簿を作成しておくことがとても大切である。この名簿は様々な調査や目標申告、人事異動時にも活用することができるからである。

そこで、先生方一人一人が入力する表計算ファイルを作成し、その内容を一つの名簿として集約する方法を考えた。年度初めに必要事項を入力・見直しをしてもらって回収、人事異動期には希望を入力してもらって回収、というように一つのファイルを活用するようにした。その結果、先生方が入力しなければならない事項は最小限になると同時に、管理職もボタンをクリックすることで一覧をまとめることができるため、作業効率のアップが図れたと思う。(①③)

#### 具体例4 出退勤管理の自動化

毎年6月と11月に職員の勤務時間の報告が求められている。行政からは、最終的な報告様式が示されているが、この報告を作成するためには大変な時間を要しているのではないかと思う。学校によっては、管理職が職員一人一人の出退勤時間を表計算ソフトに入力し、統計をとっていると聞いたことがある。

本校では、出退勤時に使用している打刻機から出力されるCSVデータを表計算ソフトで集計できる形式に変換し、報告様式に自動的にまとめる方法を工夫した。管理職にとってはこれも大きな時間短縮につながったと感じている。(③)

また、これらの工夫以外に、ICTを効果的に用いるために、改善が必要だと思うことがある。それは、行政や学校が行う「調査・集計」の報告様式をコンピュータで処理しやすい形式に工夫することである。

#### ワープロ形式による様式の工夫

一覧表（名簿等）の提出をワープロ形式で求めることは避けたほうがいい。

ワープロ形式で一覧表（名簿等）の提出を求められた場合、学年やクラス、氏名、生年

月日を先生方は一つ一つのデータを入力しており、報告数が多くなるほど多大な時間を要する。また、作成したデータの並べ替えや検索する作業も難しくなる。一覧表の提出を求める場合は表計算形式での提出とするべきである。

#### 表計算形式による様式の工夫

表計算形式の良さは、「大量のデータを一度にコピー＆貼付けができる」「簡単に並べ替えることができる」「簡単に検索や抽出ができる」ことにある。

報告様式には、「セルが結合されている」「一つのセル内に、性質の異なる複数のデータ入力を求められる」「一つのデータが複数行にわたっている」場合が見受けられる。どの場合も、並べ替えや検索、抽出ができなくなる。表計算形式での提出を求める場合、1データ1行、1セル1項目を徹底させるべきである。

また、「該当するものに○をつけてください」という質問項目があるが、回答者は、回答を○の図形で囲もうと苦労することになる。プルダウン形式で選択させるか、必要のない項目を削除させる方法が効率的だと思う。

ある程度校務のICT化が進んだ現在、これ以上の劇的な時間短縮は望めない。しかし、ICTを用いたことによる一つ一つの小さな成果を積み重ね、学校全体、市町村全体、県全体として、どのくらい負担感軽減や作業時間短縮につながったかといった働き方改革の視点も必要ではないだろうか。

# 【連載・県立高校の今】 第3回 千葉商業高校（起業家育成に関するコース） 一宮商業高校（観光に関するコース）

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

## 1 商業教育の充実に向けた取組

商業科は、商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することを目標としている。

本県の商業科では、最新の商業教育に関する情報の共有を図るとともに、各校が地元産業界と連携し、実践的な学びを推進している。

県教育委員会では、令和4年10月に「県立高校改革推進プラン」に基づき、「第1次実施プログラム」を策定した。本プログラムの「商業教育の充実」として、令和6年度から千葉商業高校に「起業家育成に関するコース」、一宮商業高校に「観光に関するコース」を設置することとした。

本稿では、令和6年度に新たにコースが設置される千葉商業高校及び一宮商業高校から、両校の取組を寄せてもらった。

## 2 千葉商業高等学校

本校では、令和6年度から「起業家育成に関するコース」として「アントレプレナーシップコース」を設置し、商業のスペシャリストや起業家精神を有する人材の育成を通じて商業教育の充実を図ることとしている。

### (1)今年度の取組（千葉大学との連携授業）

起業家精神を学ぶ取組として、1学年320人を対象に千葉大学との連携授業を行った。千葉大学は、アントレプレナーシップ教育の機会を高校生等へと拡大させる国立研究開発

法人科学技術振興機構（JST）の事業に共同機関として参画し、アントレプレナーシップ教育の普及・促進に向けた活動をしている。本校でも千葉大学とのアントレプレナーシップ教育に係る相互協力の連携に積極的に取り組んでいる。

連携授業では、千葉大学院生が中心となり開発した、オンライン教材の起業シミュレーション「ひな社長の挑戦」を活用した。これは過疎が進む地域で架空の会社を起業するストーリーとなっており、会社づくりの基礎を学ぶことができる。生徒たちはグループで意見を出し合いながら、起業側の視点で考えることができた。



### (2)授業内容

#### ○「アントレプレナーシップ」

（3年：学校設定科目）

- 創造的な視点で新たな取組を提案できる起業家精神と起業家的資質・能力を有する人材の育成を目指す。
- ビジネスの創造や知的財産権の活用方法と保護、また開発した技術をビジネスに転換する方法などについて学習する。

- 主体的で対話的な学習活動により、他者の意見を尊重する心構えを育み、創造的な発想が生まれやすい授業を展開する。
- 企業や大学との連携を図り、実社会のビジネス活動を踏まえた創造教育と実践的なキャリア教育を推進する。

### (3)今後の取組

アントレプレナーシップに関する教育教材の開発・研究や、ポスター・リーフレット等の広報・案内活動の推進に取り組む。

## 3 一宮商業高等学校

本校では、観光に関する知識や技術の習得を目指す「観光コース」を設置し、観光ビジネス従事者としての心構えやマナー、おもてなしの精神などを企業と連携しながら学ぶ。

### (1)授業内容

#### ①観光ビジネス（2年）

宿泊業や旅客輸送業など、観光ビジネスの各主体に関して、ビジネス及び関連法規の概要、観光ビジネスにおけるマーケティングや観光振興とまちづくりについて学ぶ。

#### ②観光ホスピタリティ（2年：学校設定科目）

観光ビジネスにおけるホスピタリティの概念と重要性、接客方法やマナーについてビジネスの場面を想定した学習活動を行う。

#### ③地域観光（3年：学校設定科目）

観光振興や観光まちづくりについて企画・運営する「実学」により、主体的かつ協働的に取り組む姿勢を身につける。

### (2)特別講座『ICHISHO Tourism Lab』

観光ホスピタリティについて、月に1回程度の特別講座の開講や、長期休業中の職場体験の実施により、専門性を高める。

#### ①サービス接遇講座

ホスピタリティの在り方や、観光の仕事に役立つ知識やマナーを学び、観光ホスピタ

リティの学びの深化を図る。また、「サービス接遇検定」の取得も可能である。

#### ②観光ビジネスインターンシップ

現場での実践により、観光に関する学びの深化を図る。ホテルやゴルフ場、その他観光施設等での職場体験を計画している。

#### ③中国語基礎講座

一宮町内の観光業者等の協力を得て、中国語の基礎や簡単な観光ガイドの例文を学び、中国語に触れる。

### (3)卒業後の進路

#### ①高卒で就職

- 地元観光産業への就職が中心
- ホテルやゴルフ場などの「観光ホスピタリティ系」、鉄道会社や観光バス会社などの「観光ツーリズム系」への就職

#### ②専修学校・短期大学へ進学

- 専門的な学びが深まり高卒よりも職種の選択肢が拡大
- キャビンアテンダントやグラウンドスタッフなどの航空関連への就職も可能

#### ③四年制大学へ進学

- 観光学に関する幅広い学習
- 「観光政策系」への就職  
日本政府観光局（JNTO）や観光庁職員、地方自治体観光課職員、観光地域づくり法人（DMO）などの職種への就職



# 病気療養中の児童生徒に対するICTを活用した学習保障や支援の在り方の実践



県立仁戸名特別支援学校教諭 あそう けんた 朝生 健太

## 1 はじめに

本校は、病気療養児の学習活動を支援する特別支援学校で、入院児童生徒が多く在籍している。そのため、全校行事などにおいて、従前からWeb会議システムを活用し、本校と複数の病院をつないで同時双方向型で行う教育（以下、遠隔教育とする）に取り組んでいる。

## 2 遠隔授業について

本校では、病気の治療や体調不良などの理由から、毎日の登校は難しいが、学習したいと強く願う児童生徒に学習の保障をするため、自宅や入院先の病院と学校をWeb会議システムをつないだ授業（以下、遠隔授業とする）を行っている。円滑に遠隔授業を開始するために、一人一人の病状を把握し、児童生徒や保護者に対し、体調不良や機器トラブル等の緊急時の対応方法などの説明や、使用機器の確認と準備支援を事前に行っている。

## 3 本校での取組

### (1)撮影用のカメラとマイク

学校側のカメラは、単体のビデオカメラなどを接続し、より鮮明な映像で授業を配信できるようにしている。また、書画カメラを使用して教科書や教師の手元を写すなど、場面に応じた機材の使い分けを行っている。音に関しては、パソコンから離れた位置に立って授業を行う場合でも聞き取りやすい音声で配信できるように、マイクスピーカーを接続している。

### (2)Web会議システムとクラウドサービス

インターネット上の共有ファイルを使用することで、児童生徒と教師の双方から同時にアクセスして書き込むことができるようにしている。共有画面でのやりとりが可視化され、児童生徒が学習の状況を確認しやすくなり、次の活動への移行が円滑になった。

### (3)指導上の配慮や工夫

病気療養中には、治療により身体的な変化などが生じる場合があり、児童生徒の気持ちに配慮する必要がある。その場合、行事や授業では、映像を用いず、音声のみやカメラで文字を写すほか、チャットを活用して文字のみでも参加できるようにしている。また、チャットは文字が残り、メモをとる負担を軽減しつつ正確に内容を伝えることができるので、授業前などの連絡でも活用し、安心して授業に臨めるようにしている。

ICTを活用し、病室と学校をつなぐことは、日頃会うことができない友達と交流したり、病気療養児も周囲とのつながりを感じることができたりする貴重な機会となっている。

## 4 おわりに

病気療養児の学びを支えるためにも、遠隔教育の実施に当たっては、前籍校や保護者の理解、協力体制が重要である。学びたい気持ちや、治療中であっても人とつながりたいという思いに寄り添うことは、病気療養児の心理的な安定につながるのではないかと考える。今後は、さらに授業方法や評価の在り方、使用機器について検討を重ね、病気療養中の児童生徒へのICTを活用した支援に取り組んでいきたい。

# 千葉歴史の散歩道

## 千葉県の旧石器発掘の“嚆矢”

### ～市川市丸山遺跡～

千葉県教育庁教育振興部文化財課埋蔵文化財班班長 **ながつか しゅんじ** 永塚 俊司



千葉県の北半エリアは、平坦な下総台地が広がり、日本列島で最大面積を誇る関東平野の一角を占める。旧石器時代はいわゆる「氷河期」にあたり、現在より寒冷・乾燥の気候であった。最寒冷期（約28～25万年前）において、平均気温は6～8度低く、海水面は現在よりも120m以上低下していたといわれている。「氷河期」において東京湾は完全に陸地で、その中央を流れる川は、江戸期の東遷前の利根川や多摩川などが合流しながら、今の三浦半島のあたりで、太平洋に注いでいた（古東京川）。そのため下総台地は相対的に海拔150mまで上昇し、植生を含め、現在とは異なる景観が広がっていた。

下総台地では旧石器時代の人々が使った石器や石器を作る際に飛び散った石のかけらが多く見つっている。これまでの調査によって、千葉県では1,000か所を超える旧石器時代の遺跡が見つっているが、その先駆けとなったのが市川市の丸山遺跡である。

丸山遺跡は市川市国府台4丁目にあり、下総台地の西端、市川市と松戸市の境界に近く、江戸川に面した標高25mの舌状台地の先端にあった。

1949（昭和24）年の群馬県岩宿遺跡の発掘によりローム層中から石器が見つかり、日本において初めて旧石器時代の存在が確認された。丸山遺跡は1954（昭和29）年に市川市教育委員会から古墳の調査を依頼された明治大学により、千葉県で初めて本格的な旧石器時代の発掘調査が行われ、黒曜石をはじめとする石器の集中地点が見つかったのである。

千葉県では地表面から約2m掘削するだけで、古くは3万数千年前に遡る石器群が見つかる。富士山など火山灰の給源が近い神奈川県相模野台地では同時期の石器群を見つけるには約8～9m掘らなければいけないことを考えると、2万年以上の旧石器時代の歴史が「ギュッ」と凝縮しているのが、下総台地の特徴である。発掘調査によって多くの旧石器が発見されやすいという理由もそこにある。

現在、丸山遺跡は住宅地となっているため広く周辺を見渡すことはできないが、江戸川に面した堤防から、旧石器時代の人々が見たであろう当時の景観を想像してみてもいいだろうか。出土した石器は現在、市立市川考古博物館で常設展示されているので、博物館へもぜひ足をお運びいただきたい。



丸山遺跡の位置  
(千葉県HP“ふさの国文化財ナビゲーション”より)



発掘当時の丸山遺跡  
(市川市史より)



柳原水門近くの堤防から江戸川を望む現在の景観  
(東京スカイツリーが見える)

千葉教育 菊 (No. 682) 令和5年10月26日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 鉄井 修一  
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204  
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>  
印刷所 千葉市療育センター いずみの家  
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

## 次号予告

### 『千葉教育』梅 (No.683)

◆特集 キャリア教育の推進

○シリーズ 現代の教育事情

県教育庁教育振興部学習指導課

県立茂原高等学校

県立習志野特別支援学校

○提言

株式会社なごみの米屋 代表取締役社長 諸岡 良和

### 令和5年度 シリーズ 現代の教育事情

蓮 680号	千葉の教育150年
萩 681号	生徒指導の充実
菊 682号	特別支援教育の推進
梅 683号	キャリア教育の推進
菜 684号	児童生徒の学習意欲の向上
桜 685号	チーム学校の充実

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの  
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育  
菊号 読者アンケート



表紙写真について

県立君津特別支援学校 防災の達人になろう！ 火災編